

日本略史

反刻

三

				和書門
		三四六八	號	類
四冊	一四架	函	五	

庫文閣内			
三九函		三四六八	和書類
二	架	冊	

庫文閣内	
番號	和 3468
冊數	4 (3)
函號	139 149



裏面記載のない箇所は省略

年表揭要

二千五百五十一年

北條早雲始テ起ル

二千五百七十八年

早雲相模ヲ取ル

二千五百九十八年

武田信玄甲斐ニ自立ス

二千六百一十七年

河中嶋第一回ノ戦

二千六百三十五年

毛利元就陶氏ヲ亡ス

二千六百五十二年

桶峽ノ戦

二千六百七十六年

元就山陰山陽ヲ併ス

二千六百九十年

姉川ノ戦

二千七百一十二年

三形原ノ戦

二千二百四十二年

武田氏滅ス

同年

明智光秀信長ヲ弑ス

二千二百四十四年

小牧ノ戦

二千二百四十七年

豊臣秀吉西國ヲ平ラク

二千二百五十年

秀吉北條氏ヲ伐ツ

二千二百五十二年

朝鮮ノ役起ル

二千二百五十八年

秀吉薨ス

日本書紀卷之三

笠間益三編輯

二千二百三十九年

巳十一月義政退テ東山ニ居ル

争乱ヲ以テ意ニ加ヘス諸國ノ強臣往々乱ニ架

シテ國ヲ奪フ者アリ義政置テ問ハス是ヨリ天

下ノ武人獲足利氏ニ朝セヌ山名氏及ヒ其黨與

ノ諸將諸方ニ散在シ漸ク衰滅ニ就ク獨リ細川

上杉兩氏東西ニ雄張スル故ノ如シ

二千二百四十六年

丙午是時扇谷ノ上杉定正相模大

場ニ居ル山内ノ上杉顯定上野平井ニアリ八州

ヲ管領ス八州推シテ山内公ト稱ス定正ノ臣太
田道灌才畧アリ河越江戸并ニノ二城ヲ築キ大ニ
恩威ヲ布ク八州ノ將士山内ヲ背テ扇谷ニ歸ス
ル者多シ顯定之ヲ患ヒ陰ニ道灌ヲ除キ以テ定
正ノ股肱ヲ絶ント欲ス乃チ反間ヲ縱チ盛ニ道
灌ノ材武士心ヲ得ルヲ稱ス定正稍之ヲ忌ム道
灌ヲ召シテ酒ヲ賜ヒ人ヲシテ之ヲ刺シ殺サシ
ム顯定聞テ大ニ喜テ曰定正吾術中ニ陷ル復畏
ルニ足ラス
二千百四十七年丁未長享ト改元ス九月大將軍義

崇崇六角高賴ヲ召ク高賴至ラス義尚自カヲ將ト
シテ之ヲ討ス高賴逃走ル義尚留テ鉤ノ里江近ニ
アリ
二千百四十九年巳酉延徳ト改元ス三月義尚鉤ノ
里ニ於テ病テ薨ス義尚學ヲ好ミ嘗テ藤原兼良
ニ從ヒ治道ヲ講ス兼良為メニ樵談治要ヲ著シ
テ之ニ興フ薨スルニ及テ遠近哀惜ヒサルナシ
義尚晩ニ名ヲ義熙ト改ム嗣子ナシ義政義視ヲ
美濃ヨリ召シ其子義棟ヲ養テ嗣トス後チ名ヲ
義植ト改ム

二千百五十年^{庚戌}正月前大將軍義政薨ス七月義
植大將軍ニ任ス
二千百五十一年^{辛亥}正月前大納言義視薨ス四月
左兵衛督政知其子茶々ノ弒スル所トナル初メ
政知後妻ノ子義通ヲ愛シテ茶々ヲ疎ニス茶々
之ヲ怨望シ遂ニ之ヲ弒ス義通走テ今川氏親ニ
依ル氏親即チ其將伊勢長氏ヲ遣ハシ茶々ヲ討
シテ之ヲ誅ス長氏ハ平維衡ノ遠孫ナリ長氏ノ
前數世足利氏ニ仕テ奏者タリ父ヲ貞藤ト云備
中守タリ男ヲ任處ニ生ム是ヲ長氏トス足利義

視ニ仕テ近臣タリ應仁中義視ノ伊勢ニ走ル長
氏亦之ニ從フ義視京師ニ帰ルニ及ンテ長氏從
ヒ帰ラス留テ伊勢ニアリ是時ニ當リ將軍義政
政ニ怠リ將士離叛シ權臣山名細川各私黨ヲ立
テ戰爭止ム時ナシ長氏人ト為リ聰敏明決常ニ
大志ヲ抱ク嘗テ儒士ヲシテ三畧ヲ講セシム其
始メニ曰ク主將ノ法ハ務テ英雄ノ心ヲ攬ルト
長氏之ヲ聽テ曰ク止メヨ吾既ニ之ヲ得タリト
長氏慕政ノ衰ニ衆シ天下ヲ圖ラント欲ス因テ
陰ニ財ヲ散シテ豪傑ヲ結ラ一日衆ニ謂テ曰ク

天下ノ事知ル可キノミ人苟モ功名ヲ成シ富貴
ヲ取ラント欲セハ今日ヲ舍テ、何ノ時ヲ待タ
ンヤ夫レ武ヲ用フルノ地ハ關八州ニ如クハナ
レ吾諸君ト偕ニ東行シ臨機應變以テ車ニ從ハ
ント欲ス衆皆奮然之ニ從フ長氏乃チ荒木兵庫
等數人ト東行ス時ニ文明八年ナリ終ニ駿河ニ
至リ今川義忠ニ依ル義忠卒スルニ及ンテ子氏
親猶幼ナリ長氏親ヲ輔ケテ功アリ將士長氏
ヲシテ八幡山城駿河ニ居シム後チ徙テ高國寺城
駿河ニ居ル陰ニ伊豆ヲ取ランイヲ圖リ未タ間ヲ

得ス乃チ政令ヲ修メ賦稅ヲ輕クシ務テ恩ヲ遠
近ニ布ク遠近漸ク衆リ從ヒ城下ニ聚落ヲ成ス
茶々政知ヲ弑スルニ及テ長氏衆ヲ集テ伊豆ヲ
取ランイヲ議ス衆奮テイヲ効サシイヲ願フ乃
チ今川氏ノ兵ヲ供セテ伊豆ニ入り茶々ヲ誅ス
長氏遂ニ伊豆ニ留リ務テ恩威ヲ國內ニ布ク國
内ノ將士相率テ長氏ニ歸ス乃チ令ヲ出シ租稅
ヲ減シ諸雜課ヲ除ク民皆悅服ス因テ盡ク伊豆
ヲ領シ自カヲ韭山城伊豆ニ居ル韭山ニ北條氏ア
リテ嗣絶フ長氏ヲ養ヒ女ヲ以テ之ニ妻ハス長

氏以為ヲク北條伊勢兩氏共ニ平姓ト遂ニ自
カラ北條氏ヲ称シ髮ヲ削テ早雲ト号ス遂ニ相
横ヲ取テシテヲ圖ル是時ニ當リテ上杉定正方
ニ上杉顯定ニ克テ兵威頗ル振テ定正意太驕ル
或ト定正ヲ諫テ曰ク扇谷ハ支庶ナリ能ク山
内ニ枕スル所以ハ太田道灌アルヲ以テ今ヤ既
ニ道灌ヲ失フ兵力衰弱ニシテ偶然勁敵ニ克ツ
ハ僥倖ナリ今ニシテ戒メスハ禍將ニ至ラン
トスト定正攻ムルヲ能ハス早雲因テ好ヲ定正
ニ通シ助テ以テ顯定ヲ攻ム是ニ於テ兩上杉氏

皆漸ク衰フ

二百五十二年^{壬午}明應ト改元ス
二百五十二年^{癸丑}時ニ畠山政長管領タリ政長
宿將ヲ以テ自カラ威望ヲ負ヒ諸將ヲ輕侮ス畠
山義就ノ子義豊政長ノ專横ヲ訴テ遂ニ兵ヲ奉
ク三月政長義植ヲ奉シテ義豊ヲ討ス義豊^{ホム}警田^タ
城^河内ニ據ル政長之ヲ攻テ赤タ下ス^ト能ハス時
ニ細川政元政長ト推テ相忌ム義豊因テ好
ヲ政元ニ通シ俱ニ兵ヲ供セテ義植ヲ攻ム義植
兵敗テ脱走ス政長自殺ス政元既ニ戰勝テ京師

ニ歸リ將軍ノ嗣ヲ立シテ議ス初メ足利義通ノ走テ今川氏ニ歸スルヤ今川氏之ヲ京師ニ送ル義植之ヲ天龍寺ニ置キ將ニ僧ト為サント人此ニ於テ政元議ヲ決シテ義通ヲ立テ嗣トス義通後々名ヲ義澄ト攻ム閏月政元義植ヲ捕ヘテ之ヲ幽ス六月義植逃テ越中ニ走リ遠ニ周防ニ赴キ大内氏ニ頼ル大内義興義植ヲ助テ兵ヲ起サントテ計ル政元ノ養子高國事ヲ以テ政元ヲ怨ミ叛シテ亦大内氏ニ通ス此ニ於テ細川ノ族分レテ兩黨トナリ京畿大ニ乱ル

二千百五十四年甲寅義澄征夷大將軍ニ任ス細川政元管領タリ十月北條早雲上杉定正ヲ助テ上杉顯定ヲ攻ム定正軍中ニ死スルニ會シ子朝良走リ歸テ河越ヲ保ツ早雲モ亦兵ヲ引テ韭山ニ歸ル早雲相模ヲ取ラント欲スルコト文レ小田原相模ノ城主大森藤頼猶弱ナリ早雲其城ヲ取ラント欲シテ箱根ノ嶮ヲ憚カリ未タ發スル能ハス
二千百五十五年乙丑九月早雲人ヲシテ藤頼ニ言ハシメテ曰ク吾韭山ニ據ス獸箱根山中ニ逃ル

願クハ我ニ假スニ箱根ヲ以テセヨ吾縱マハ
狩リ取ラン藤頼之ヲ許ス早雲乃チ獵衣ヲ着ケ
百餘人ヲ帥テ箱根ヲ踰エ先ツ牛藪十ヲ放チ法
螺ヲ鳴ラシ之ニ隨フ高ヨリ馳セ下リ直チニ城
内ニ入ル藤頼狼狽為ル所ヲ知ラス出テ三浦ニ
走ル早雲遂ニ小田原ヲ取ル是ノ時ニ當リ海内
武人互ニ相争奪シテ朝廷幕府アルヲ知ラス
二千百六十年_{庚申}九月天皇崩ス太子即位ス是ヲ
後柏原天皇トス
二千百六十一年_{辛酉}文龜ト改元ス

二千百六十四年_{甲子}永正ト改元ス九月上杉朝良
早雲ト兵ヲ供セテ上杉顯定ヲ攻ム後チ朝良顯
定ト和テ結ヒ早雲ヲ圖ル
二千百六十八年_{戊辰}三月大内義興前將軍義植ヲ
奉シテ山陰山陽西海三道ノ兵ノ率テ東上ス細
川高國亦兵ヲ率テ之ニ應ス高國ハ細川政元ノ
族政春ノ子ニシテ政元ノ養子タリ政元死スル
ニ及ンテ嗣タルヲ得ス故ヲ以テ居常快々タリ
此ニ至テ遂ニ兵ヲ率テ義植ニ從フ將軍義澄大
ニ懼レテ義國ニ書ヲ興ヘテ和ヲ求ム義國肯シ

セス義澄近江ニ走ル義植義興京師ニ入ル六月
詔シテ義澄ノ官爵ヲ削テ復義植ニ與フ義植義
興ヲ以テ管領トス
二十百七十年^{庚午}六月上杉頭定長尾氏十信濃ニ
戰フテ敗死ス是ニ於テ北條早雲勢益振フ
二十百七十一年^{辛未}八月義澄近江ニ於テ卒ス
二十百七十八年^{戊寅}七月北條早雲盡ク相模ヲ取
ル是ヨリ先キ早雲既ニ小田原ヲ取り威益張ル
近隣ノ豪傑未属スル者太ク多シ獨リ三浦義嗣
從ハス新井城^{相模}ニ據ル早雲之ヲ攻マル速歲遂

ニ之ヲ陷イレ義同ヲ殺ス此ニ於テ相模一州尽
ク早雲ニ從フ八月大内義興京師ニ在テ費用支
ヘ難キヲ以テ西ニ帰ル細川高國管領トシテ
二十百七十九年^{己卯}八月北條早雲卒ス子氏綱嗣
ク
二十百八十一年^{辛巳}大永下改元ス三月細川高國
將軍義植ヲ逐フ義植淡路ニ走ル高國義澄ノ子
義晴ヲ迎テ之ヲ立ツ詔シテ義植ノ職ヲ奪テ之
ヲ義晴ニ與フ
二十百八十三年^{癸未}四月義植薨ス

二百八十四年^{甲申}北條氏綱父ノ遺業ヲ繼テ相
 換ヲ平定シ遂ニ進テ武藏ヲ取ラン^一ヲ計ル正
 月江戸城ヲ攻テ之ヲ拔キ上杉朝興ヲ走ラシム
 朝興退テ河越ヲ保
 二百八十六年^{丙戌}四月天皇崩ス太子即位ス是
 ヲ後奈良天皇トス
 二百八十七年^{丁亥}二月三好元長細川晴元ヲ奉
 シテ京師ニ入ル細川高國之ヲ桂川^{山城}ニ防キ興
 ニ戦フテ敗走ス
 二百八十八年^{戊子}享祿ト改元ス正月晴元高國

卜和ヲ議ス既ニレテ和議復敗ル高國橋本ニ走
 リ援兵ヲ浦上氏ニ請フ將軍義晴モ亦近江ニ走
 リ佐々木氏ニ依ル
 二百九十一年^{辛卯}六月高國浦上氏ノ兵ヲ得テ
 晴元ヲ振津ニ攻ム是ヨリ先キ晴元諛ヲ信シ三
 好元長ヲ疎ス元長怨望阿波ニ歸ル此ニ至リテ
 晴元意頗ル悔ユ乃チ復元長ヲ召シテ自カラ授
 ク元長乃チ晴元ヲ奉シ高國ト天王寺ニ^{振津}戦セ
 大ニ之ヲ破リ高國ヲ獲テ之ヲ殺ス
 二百九十二年^{壬辰}天文ト改元ス晴元意猶ホ元

長ニ快カラス遂ニ之ヲ殺ス元長死スルニ陪シ
テ妻ヲシテ子長慶ヲ携テ阿波ニ遁レシム
二千百九十三年^巳細川晴元京師ニ入り將軍義
晴ヲ近江ヨリ迎フ晴元自カラ管領タリ
二千百九十七年^{丁酉}是ヨリ先キ北條氏綱屢河越
ヲ攻テ未タ下ス^ナ熊ハス足利高基ハ成氏ノ孫
ナリ氏綱ノカラ假テ上杉氏ニ報セント欲シ子
晴氏ノ為メニ氏綱ノ女ヲ娶ル此ニ於テ氏綱上
杉氏ノ罪ヲ鳴ラシ関東ノ將士ニ告諭シ益兵ヲ
出シテ河越ヲ攻ム時ニ朝興既ニ卒シテ子朝定

嗣テ立ツ是歲七月氏綱大ニ朝定ヲ破リテ終ニ
河越城ヲ取ル朝定走テ松山^{武藏}ノ城主^ナ難波田氏
ニ依ル氏綱又撃テ大ニ之ヲ破ル此ニ於テ氏綱
ノ威望遠近ニ振ヒ武藏下總ノ諸城相率テ服從
ス獨リ足利義明下總ノ御子ニ在テ氏綱ト強ヲ
争フ義明ハ高基ノ弟ナリ
二千百九十八年^{戊戌}氏綱兵ヲ出シテ御弓ヲ攻ム
里見義弘房總ノ兵ヲ帥ヒ未テ義明ヲ援フ十月
氏綱^{下總}嶋ノ臺ニ戰フテ大ニ之ヲ破ル義弘敗走
シ義明補獲セラレ此歲武田晴信其父信虎ヲ逐

テ甲斐ニ自立ス晴信ハ新羅三郎義光ノ遠孫ナ
リ父信虎少子信繁ヲ愛シテ晴信ヲ廢セント欲
ス晴信常ニ愚人ノ態ヲ裝フテ以テ自カラ晦マ
ス故ヲ以テ人皆晴信ヲ侮ル而シテ晴信自カラ
駿河ノ國主今川義元ト相結フ信虎ノ海^{ウミ}呼^ヨノ城
濃^ノヲ攻ムルヤ晴信奇策ヲ設テ城將平賀源心^{ヒラカダシ}ヲ
斬ル信虎益、晴信ヲ恐ム晴信因テ益、義元ト相親
シム義元常ニ信虎ヲ除キ晴信ヲ立テント欲ス
而シテ信虎之ヲ知ラス此ニ至テ信虎晴信ヲ逐
ハント欲シ自カラ駿河ニ至リ義元ニ謀ル義元

因テ信虎ヲ拘留ス此ニ於テ晴信甲斐ニ自立ス
二十二年^{庚子}九月尼子晴久兵ヲ發シテ毛利元
就ヲ吉田城^{安藝}ニ攻ム大内義隆其將ヲ遣ハシテ
元就ヲ援フ晴久敗走ス晴久ハ塩谷高貞ノ後裔
ニシテ世出雲ニ居ル山名氏衰フルニ及ンテ遂
ニ隣境ヲ共セテ頗ル強大ヲ致セリ元就ハ大江
廣元ノ遠孫ニシテ世安藝ニ居リ吉田城ニ據ル
初メ元就晴久ニ属シ後テ背テ大内義隆ニ附ク
晴久怒ル故ニ之ニ及ベリ
二十二年^{辛丑}北條氏綱卒スマ氏康嗣ク此時

ニ當リ上杉朝定勢漸ク衰へ上杉憲政東北ニ雄
張ス憲政強ク恃ミ游宴ニ耽リ武事ヲ問ハス常
ニ北條氏ヲ侮リ以テ意トセス故ヲ以テ將士多
ク竊カニ情ヲ氏康ニ通ス或ヒト憲政ニ告テ曰
ク北條氏能ク士心ヲ得ル備ハスハアル可カ
ラスト憲政困テ朝定ト和ヲ結ビ國內ニ令ヲ布
キ奢萃ヲ停メ武備ヲ講ス既ニシテ或ヒト甘言
ヲ以テ憲政ニ啗ハシメテ曰ク北條氏ハ鄙族人
ノカニ依リ以テ國土ヲ攘ム者恐ルニ足ラス
ト此ニ於テ憲政宴樂故ノ如シ

二十二年三年 癸卯正月大内義隆兵ヲ出シテ尾子
晴久カ畠田城^出ヲ攻ム毛利元就亦兵ヲ帥テ之
ニ從フ克タスレテ還ル是歲葡萄酒ノ人種カ崑
大ニ來ル言語通セス杖ヲ以テ地ニ畫キ互市ヲ
求ムルノ意ヲ示ス時ニ葡人烏銃ヲ齊シ來ル是
ヨリ吾邦始テ鳥銃アリト云
二十二年四年 甲辰是ヨリ先キ武田晴信ハ臣板垣
信形參河ノ人山本勘助ヲ晴信ニ薦ハ晴信名ヲ
晴行ト賜フ晴信晴行ノ謀計ニ依テ信濃ノ數城
ヲ取ル此ニ至テ武田氏ノ威北方ニ振フ

二千二百六年^{丙午}是ヨリ先キ上杉憲政既ニ上杉
朝定ト和ヲ結フ此一^一至テ俱ニ兵ヲ出シテ北條
氏康ヲ攻ム足利晴氏亦兵ヲ出シテ兩上杉ヲ援
ケテ河越ヲ圍ム守將北條綱成勇名アリ固ク守
テ下ラス氏康自カラ兵ヲ帥テ之ヲ援フ故サラ
ニ弱ヲホシテ屢退キ走ル上杉氏等驕慢氏康ニ
備ヘス氏康乃チ夜ニ策シテ直ニ上杉氏ノ陣ヲ
襲フ上杉ノ軍大ニ驚テ擾乱ス氏康遂ニ朝定ヲ
捕ヘ憲政晴氏ヲ走ラス此ニ於テ八州ノ豪傑響
ノ如ク應シ即夜北條氏ニ降ル者數ヲ知ラス氏

康ノ威聞東ニ震ヒ上杉氏益衰フ時ニ細川晴元
京師ニアリ游佐^{ユサ}長教等兵ヲ攝津河内ニ起シ京
師ニ向フ晴元兵ヲ發シテ之ヲ撃ツ克タス乃チ
三好長慶ヲ召ス長慶晴元ノ其父ヲ殺スヲ怨ミ
輒チ命ニ應セス其弟之ヲ謀ム乃チ兵ヲ帥テ晴
元ニ從ヒ游佐等ヲ撃ツ既ニシテ長慶三好京三
ノ諺スル所ト為ル因テ復游佐等ニ連和セント
欲スルノ志アリ
二千二百七年^{丁未}三月初メ足利義晴細川晴元ヲ
悉ク管領職ヲ奪ハント説ス晴元之ヲ覺リ將ニ

先ッ發レテ義晴ヲ政メントス義晴出走リ將軍
職ヲ子義輝ニ讓ル此ニ至テ義晴義輝北白河城山
ヲ保ウ四月晴元六角定頼ト謀ヲ通シ北白河ヲ
攻ム義晴義輝坂本江_邊ニ走ル既ニシテ和ヲ講ス
晴元管領タル故ノ如シ是歲武田晴信兵ヲ出シ
テ村上義清ヲ信濃ニ攻メテ之ヲ敗ル義清越後
ニ走リ長尾景虎ニ依ル景虎ハ平良文ノ遠孫ナ
リ良文ノ後數十世ヲ為景ト云フ為景四子アリ
季子ヲ景虎トス為景景虎ヲ愛セス以テ僧ト為
ント欲ス景虎肯テ僧ノ事ヲ學ハス為景ノ死ス

ルニ及ンテ諸將多ク意ヲ景虎ニ屬ス為景ノ長
子晴景晴劣ナリ大臣等之ヲ利トシテ晴景ヲ立
テ景虎ヲ殺サント謀ル景虎逃走ル宇佐美定
行等之ニ從フ遂ニ兵ヲ起シテ榑尾城_越ニ據ル
晴景未リ攻ム景虎防戰大ニ之ヲ破リ晴景自殺
ス諸將士皆景虎ヲ推シテ主トス景虎曰ク吾勢
已ムヲ得スシテ兄ト兵ヲ抗スルニ至ル豈兄ノ
死ヲ料シヤ而レテ今吾國ニ主タラハ人吾ヲ何
ト謂ハン今別ニ主ヲ擇フヘシ吾ハ僧衣ヲ被テ
以テ吾志ヲ明カサント遂ニ髮ヲ削テ謙信ト号

日本書紀 卷之三 十五

ス諸將士強ヒテ勸メテ主ト為ント欲ス謙信乃
テ諸將ト誓テ曰ク君ヲ置クハ將ニ其令ヲ仰ン
トス今ヨリ吾令スル所敢テ違背スル無レハ吾
諸君ノ請ニ從ハント明日推ヲ專ニスル大臣十
六人ヲ殺ス諸將皆股栗ス此ニ至テ義清等謙信
ニ謁シテ曰ク僕等武田信玄ノ苦ムル所トナル
公ノ威名ヲ慕ヒ未テ救援ヲ請フト謙信許諾ス
十月兵ヲ帥テ信濃ニ入り河中嶋信濃ニ陣ス信玄
歩騎二万ヲ帥テ謙信ト水ヲ夾テ陣ス相持シテ
未夕戰ハス謙信戰ヲ挑ム信玄迎ヘ戰フ卯ヨリ

未ニ至ル勝敗未夕決セス謙信兵ヲ分テ上流ヲ
渡テ信玄ノ軍後ヲ襲フ信玄ノ軍顧ミテ退キ走
ル將士死スル者太夕多シ謙信ノ兵亦死傷頗ル
多シ乃チ引歸ル是ヲ河中嶋第一回ノ戰トス
二十二年酉三月三好長慶終ニ許佐長教ト
連和シ細川氏綱ニ應レ三好宗三ヲ攻ム宗三敗
走シテ榎並城津ヲ保ツ細川晴元兵ヲ出シテ宗
三ヲ援フ長慶攻テ又之ヲ破ル宗三走リテ江口
江ニ死ス晴元ハ坂下伊ニ走ル
二十二年戊二月晴元如意岳山城ニ城キ義晴

二十二年

六

義輝ヲ挾ニテ長慶ノ末襲ニ倫フ既ニシテ義晴
薨ス十一月長慶京師ニ入ル進ンテ大津ニ至ル
義輝朽木江_江ニ徙ル晴元志賀_江ニ陣シ長慶ヲ迎
ヘ撃テ敗走ス
二千二百十一年_辛是ヨリ先キ北條氏康扇谷ノ
上杉氏ヲ滅ス是歲氏康又上杉憲政ヲ平井城_{野上}
ニ攻メ之ヲ陷イル憲政越後ニ走リ長尾景虎ニ
依リ其姓氏官號ヲ以テ尽ク景虎ニ授ク此ヨリ
景虎上杉氏ヲ冒シ關東ノ管領ト称ス是ニ於テ
兩上杉氏皆滅フ

二千二百十二年_壬正月將軍義輝三好長慶小和
シ京師ヲ還ル細川晴元ノ管領ヲ罷ム
二千二百十三年_癸七月義輝三好氏ノ專恣ヲ苦
シ又復晴元ヲ召還ス長慶怒テ義輝ヲ攻メシト
ス義輝晴元復逆江ニ走ル尋テ和ヲ講シテ京師
ヲ歸ル長慶入テ謁シ晴元ヲ_好川城_根津_根囚フ歲
ヲ踰テ卒ス_年
二千二百十四年_甲八月上杉謙信復兵ヲ帥テ信
濃ニ入り犀川ニ陣ス武田信玄迎ヘ戰フテ敗走
ス是時ニ當リ東國尽ク北條氏康ニ歸ス而シテ

獨リ足利晴氏古河城下ニ據リ氏康ニ從ハス十月氏康攻テ之ヲ陷イレ晴氏ヲ執ヘテ閑宿下ニ置キ其子義氏ヲ立テ鎌倉葛西谷ニ居ラシム
 二十二年五月卯弘治ト改元ス十一月毛利元就陶晴賢嚴島ニ戰フテ大之ヲ破リ晴賢ヲ誅ス初メ元就三子アリ伯ヲ隆元仲ヲ元春叔ヲ隆景ト云元春吉川氏ノ後ヲ嗣キ隆景小早川氏ノ後ヲ受ケ是ニ於テ吉川小早川並ニ毛利氏ノ羽翼タリ毛利氏ノ兵鋒益銳ニ是時ニ當リテ大内義隆歌詠ニ耽リ武事ヲ怠ル陶晴賢頗ル

士心ヲ得テ義隆ノ寵臣ヲ殺サンコトヲ謀ル謀成ラズ晴賢退テ其邑若山周防ニ歸リ日夜反逆ヲ謀ル遂ニ兵ヲ舉テ山口周防ヲ攻メ義隆拒クコト能ハス走テ筑紫ニ赴ク風ニ阻テラレ還テ大寧寺門ニ入ル賊兵未リ圍ニ義隆自殺ス晴賢豊後ノ國主大友義鎮ノ弟義長ヲ迎テ奉シテ以テ主トス義隆ノ死スルヤ書ヲ遺シテ元就ニ託スルニ陶氏ヲ滅スヲ以テス乃チ議シテ朝廷ニ請フテ曰ク大内義隆常ニ心ヲ王室ニ存ス圖ラヌモ賊臣晴賢ノ弒スル所トナレリ臣元就微力ヲ奮

八
六

討伐ヲ圖ル伏シテ願クハ賊ヲ討スルノ詔ヲ
得ンコトヲ朝議之ヲ許ス元就書ヲ遠近ニ移ス
應スル者頗ル多以元就諸子ト謀リテ曰ク彼ノ
兵三万我兵五千衆寡懸絶典ニ平地ニ戰フ可カ
ラス宜シク嚴嵩ニ城キ誘キ致シテ之ヲ蹙迫ス
可シト是歲六月城成ル已斐新里ニ氏ヲ命シテ
之ヲ守ラシム九月晴賢兵三萬戰艦千餘艘ヲ以
テ岩國防周至リ戰ヲ議ス元就書ヲ贈リ罪惡ヲ
責ム晴賢乃チ意ヲ決シテ直ニ嚴鳴ヲ攻ム陣ヲ
塔圍安ニ布キ舟艦海ヲ擁ス城兵堅ク守ル元就

一將ヲ留メ吉田ヲ守ラシメ自カラ精兵三千ヲ
帥テ草津安ニ至リ晴賢ト海ヲ隔テ、陣ス一夜
大風雨元就潛カニ船ヲ發シ浪ヲ破テ渡ル直ニ
賊陣ノ背ニ出ツ賊風雨ヲ恃ンテ備ヲ設ケス元
就俄カニ鼓噪ヲ鳴ラシ急ニ之ヲ攻ム賊ノ諸軍
大ニ驚キ暗中ニ相撃ツ賊兵終ニ大ニ敗レ舟ヲ
争フテ道ル晴賢自殺ス元就嚴鳴ニ留ルコト十
一日ニシテ兵ヲ引テ凱旋ス元就ノ威関西ニ震
フ周防ノ人相驚テ曰ク毛利氏ノ軍至ルト陶長
房接ヲ大友氏ニ求ム大友氏敢テ德セス十二月

元就周防ニ入り攻テ長房ヲ殺ス周防ノ將士多ク歎テ元就ニ送ル元就遂ニ山口ヲ取り兵ヲ分テ長府下関門ニ赴カレメ以テ大友氏ノ援路ヲ絶シ周防長門ノ士民山口ニ雲集ス元就兵ヲ引テ安藝ニ帰ル是ニ於テ元就尽ク大内氏ノ地ヲ供セテ遂ニ尼子氏ヲ圖ル

二十二年丙辰此武田信玄既ニ盡ク信濃ヲ定ム三月信玄謙信ト復河中嶋ニ對陣ス信玄山本晴行等ト謀テ曰ク我兵ヲ分テ北軍ノ後ニ出テ本軍メ以テ夾テ之ヲ擊タルト乃ク保科彈

正等ヲシテ兵六千ヲ以テ戸神山信濃ヲ越テ北軍ノ後ヲ襲ハシム時二月黒ク道ニ迷ヒ未夕達スル韃ハス謙信甲斐ノ軍夜ル人馬声アルヲ怪シミ潜カニ令テ傳テ八十騎ヲ將ヒテ直チニ信玄ノ營ヲ襲フ天大ニ霧フルニ會ス謙信霧中ヨリ斬ル保科等ノ軍北軍ノ營ニ達スレハ營中隻騎ナフシテ河中嶋ノ戦声雷ノ如キヲ聞キ還テ筑摩河信濃ヲ渡テ北軍ノ後ニ出ツ甲斐ノ軍之ヲ見テ返シ戦フ夾テ北軍ヲ擊ツ北軍敗レ走ル甲斐

ノ軍疲カレテ復追撃セス是ヲ河中嶋第二回ノ
戦トス八月謙信復河中嶋ニ出ツ謙信自カラ兵
ヲ分テ河ヲ渡リ水ヲ背テ陣ス信玄持重敢テ出
テ戦ハス北軍營ヲ掃テ將ニ去ラントス諸將皆
追撃セント欲ス信玄曰ク謙信豈夜ニ迫テ退キ
去ル者ナラシヤト天明ルニ及レテ北軍陣ヲ嚴
ニシテ侍ツ諸將始メテ信玄ニ服ス信玄伏兵ヲ
山間ニ設ケテ戦ヲ挑ム謙信出テス信玄兵疲ル
ハヲ慮カリ夜ニ衆レテ退テ上野原信濃ニ入ル謙
信追撃ス信玄返戦フ交兵ヲ收メテ帰ル是ヲ河

中嶋第三回ノ戦トス甲越連年兵結テ解ス今川
義元為メニ周旋シテ和ヲ結ハシム
二十二年十七年丁巳九月天皇崩ス正親町天皇即
位ス
二十二年十八年戊午永祿ト改元ス
二十二年十九年己未初メ上杉憲政ハ越後ニ走ル
マ謙信ニ依リ以テ北條氏ニ報セント欲ス謙信
乃チ人ヲシテ北條氏ヲ窺ハシメ遠ニ兵ヲ將テ
上野ノ數城ヲ取ル此歳五月京師ニ入り關ニ詣
ル天皇賜フニ酒及ヒ劍ヲ以テス又將軍義輝ニ

謁ス義輝賜フニ偏名ヲ以テレ名ヲ輝虎ト改ム
二千二百二十年庚申正月謙信兵十一万ヲ帥テ小
田原ヲ攻ム氏康議レテ曰ク謙信成ヲ以テ諸將
ヲ馭ス諸將必ス服セサル者アラン我姑ラクカ
ヲ批セスシテ坐カラ其變ヲ待タバ彼將サニ自
カラ退カントス不取テ出テ戰ハス諸將士果シ
テ謙信ノ無禮ヲ憤リ或ハ去リ或ハ叛ク謙信遂
ニ兵ヲ收テ走リテ越後ニ歸ル関東復氏康ニ服
從ス五月今川義元大舉シテ尾張ニ入ル織田信
長迎ヘ撃テ桶峽尾張ニ戰ヒ大ニ之ヲ破リ義元ヲ

斬ル初メ義元既ニ駿河遠江参河ヲ定メ遂ニ尾
張ヲ取ラント欲ス此ニ至テ自カラ兵四万五千
ヲ將ヒテ来リ攻ム鷲津丸根尾張ニ守將急ヲ信
長ニ告ク信長赴援ハントス夜ル宴ヲ設ケ酒酣
ニシテ信長起テ舞ヒ古謡ヲ歌テ曰ク人間五十
年下天ノ内ヲ較レハ夢幻ノ如クナリ一度生ラ
受ケ滅ゼヌ者ノ有ヘキカト舞ヒ畢リテ天明ク
即チ單騎鞭ヲ揚ケテ發ス敵ク從フ者十餘人熱
田祠尾張ニ至ル比ホヒニ千人ヲ得タリ行諸城ノ
兵ヲ發シ兵凡ソ三千東望スレハ鷲津丸根ニ成

火起ル將士逡巡ス信長益馬ニ鞭テ進ム時ニ義
元桶峽ニ陣レ戰勝テ備ヲ設ケス信長乃チ鼓旗
ヲ伏セ疾ク馳セテ桶峽ニ至リ高キヨリ義元ノ
營ヲ窺ヒ乃チ馬上槍ヲ揮フテ馳セ下ル雷雨昏
冥ナルニ會ス直チニ營ヲ砌テ入ル義元ノ軍大
ニ驚キ狼狽出ル所ヲ知ラス毛利秀高進ニテ義
元ヲ斬ル義元ノ軍遂ニ大ニ敗ル信長清洲尾張ニ
凱旋ス信長ノ名天下ニ振フ信長ハ平重盛ノ後
裔ナリ父ヲ信秀ト云フ信秀ノ前數世尾張清洲
城ニ居ル信秀ハ度子ヲ以テ勝幡城尾張ニ尾ハ信

秀屢美濃ノ齋藤秀龍ト戰フ後チ和ヲ講ス秀龍
女ヲ以テ信長ニ妻ハス信長如ニシテ豪蕩武事
ヲ喜ム信秀既ニ死シ信長益武事ヲ講レ遂ニ清
洲ヲ取ル秀龍ノ子義龍父秀龍ヲ弑スルニ及ン
テ信長兵ヲ發シテ秀龍ヲ殺フ遂ニ諸城ヲ攻略
ス今川氏ヲ破ルニ及ンテ終ニ尽ク尾張ヲ併ス
二千二百二十一年辛酉是ヨリ先キ武田上杉和議
復敗ル八月謙信復信濃ニ入り西條山ニ營ス信
玄二万騎ヲ帥テ来リテ兩宮渡信濃ニ陣ス謙信出
テ戰ハス信玄兵ヲ河中嶋ニ伏セテ軍ヲ分チ直

上本居史 卷之三

ナニ西條山ヲ攻ム諷信ノ斥候既ニ之ヲ知ル諷
信乃チ信玄ノ意外ニ出テシト疑兵ヲ山上ニ置
キ自カラ全軍ヲ帥テ人ハ枚ヲ衝キ馬ハ舌ヲ捲
キ兩宮渡ヲ涉テ直チニ進ミ甲斐ノ軍ヲ壓シテ
陣シ兵ヲ分テ筑摩川信渡ノ畔リニ陣セシム時ニ
甲斐ノ別軍既ニ西條山ニ向フ信玄報ヲ俟テ未
タ至ラス黎明越軍ノ旗幟前ニ在ルヲ見テ將士
皆愕然トレテ驚ク越軍鼓ヲ鳴シテ進ム信玄陣
ヲ攻ムルニ暇アラス弓銃手ヲ以テ拒キ戰フ諷
信進シテ信玄ノ麾下ニ逼ル信玄走テ犀川ニ赴

ク越軍尾撃シテ之ヲ破ル甲斐ノ別軍返シ戰フ
テ越軍ヲ退ク謙信犀川ヲ背ニシテ陣ス使ヲ遣
ハシテ再々ヒ戰ハント欲ス信玄肯テ出テス
ニ千二百二十二年壬戌此時ニ當リテ足利氏大ニ
衰ヘ七道ノ將士各其國ニ據リ爭奪已ム時ナシ
獨リ織田信長慨然トシテ天下ヲ平定スルノ志
アリ是歲十月天皇タケノ立入京繼ヲ以テ使トシ勅旨
ヲ信長ニ賜フ詔スルニ天下ヲ亂ラ定ムルヲ以
テス信長沐浴衣ヲ更タメ勅旨ヲ拜シ宗繼ニ謂
テ曰吾聞ク天子ハ天下ノ君ナリ宜シク吾ヨリ

臣職ヲ共ス可シ今反テ使命ヲ辱テフス吾何以
テ之ニ堪ヘン當サニ天威ヲ藉テ以テ凶徒ヲ平
ラケ以テ報復ヲ圖ル可シト勅旨ヲ以テ部下ノ
將士ニ告ク是ニ於テ日夜西上ノ車ヲ議ス時ニ
信長ノ部下柴田勝家丹羽長秀木下秀吉等謀將
勇士輩出ス秀吉ハ尾張愛智郡中邑ノ民彌助ナ
ル者ノ子ナリ母日輪懷ニ入ルト夢ム既ニシテ
姓メルコトアリテ秀吉ヲ生ム如字ヲ日吉ト云
父彌助死スルニ及ンテ母ト共ニ邑大ニ寄食ス
邑人之ヲ厭ヒ母ヲ同里ノ筑阿弥ナル者ニ納ル

筑阿弥日吉ヲシテ僧トナラシム日吉天質機敏
ニシニ僧事ヲ學フヲ欲セス慨然トシテ曰ク僧
ハ乞丐ノ徒ナリ大丈夫亂世ニ生レ安ツ乞丐ヲ
樂フコトヲ為ンヤト游嬉意ニ任セ僧ヲシテ已
レヲ厭ハシメント欲ス僧遂ニ父ニ謝シ日吉ヲ
シテ寺ヲ出テシム父復遣ハシテ人ノ奴ト為ス
至ル所口僅カ數月ニシテ去ル二十歳ナル比ホ
ヒニ遠ニ遠江ニ至リ松下之網ノ奴トナル之網
名ヲ興助ト命ス一日興助ヲシテ尾張ニ至ラシ
メ朋圓ノ鎧ヲ買ハシム因テ黄金六圓ヲ付シテ

日本書紀 卷之三

之ヲ遣ル與助遂ニ其金ヲ攘ンテ刀劍衣服ヲ整
ヘ自カラ姓名ヲ作リテ木下藤吉ト云以為ラク
今天下ノ豪傑織田信長ニ非ラスンハ共ニ功名
ヲ成スニ足ル者ナント乃チ信長ニ仕ヘント欲
シ信長ノ出ルヲ伺ヒ道側ニ跪キ拜レテ曰ク臣
カ父筑阿弥嘗テ先君ノ奴タリ願クハ君復臣ヲ
以テ家奴ニ亮テヨ信長熟視シテ笑テ曰ク汝カ
西ハ猿ニ似タリ心必ス捷ナラント收メテ以テ
奴トス是ヨリ常ニ鞋ヲ提テ以テ從ヒ勤仕太夕
勉ム信長寢之ヲ親近ス後チ遂ニ進メテ吏トス

屢謀計ヲ信長ニ獻ス毎ニ其意ニ適ス
二十二年二十三年癸亥是ヨリ先キ北條氏康國ヲ
子氏政ニ授ケテ老ス自カラ武田信玄ト兵ヲ合
セ攻メテ松山城ヲ取ル松山ハ太田資正ノ属城
ナリ資正使ヲ遣ハシテ里見義弘ニ説ク是歳正
月義弘兵ヲ下総ニ出シ資正ト合シテ江戸城ヲ
襲ハント欲ス城將之ヲ知り急ニ守備ヲ修メ使
ヲ馳セテ氏康ニ報ス氏康氏政兵ヲ將ヒテ小田
原ヲ發ス義弘ト鴻ノ臺ヲ夾ンテ陣ス進ンテ臺
傍ニ戰フ北條氏ノ兵敗走ス義弘意太夕驕ル以

為ラク氏康復進ミ戰フ能ハスト甲ヲ叙キ兵ヲ
 休ス氏康之ヲ知り軍ヲ分テニツトシ日暮大霧
 咫尺辨セサルニ會シ二軍莖ノ南北ヨリ鼓譟シ
 テ登ル聲天地ヲ動カス義弘ノ軍大ニ驚テ潰走
 ス義弘資正僅カニ身ヲ以テ免カル八月松永久
 秀其君三好義長ヲ弑ス義長ハ長慶ノ子ナリ時
 ニ長慶老病政ヲ久秀ニ委ス久秀義長ノ才望ヲ
 忌ミ遂ニ之ヲ毒殺ス十河一存ノ子義繼ヲ以テ
 長慶ノ嫡嗣トス一存ハ長慶ノ第十子是歲足利
 氏使ヲシテ勅旨ヲ傳ヘ武田上杉北條三家ヲ

テ和ヲ講シ兵ヲ息メシム
 二千二百二十四年甲子初メ齋藤義龍既ニ父秀龍
 ヲ弑シ子龍興ニ傳フ龍興庸劣將士多ク心ヲ信
 長ニ歸ス信長困テ美濃ヲ略取シ九條洲股ノ二
 城ヲ築キ木下秀吉等ヲシテ之ヲ守ラシム時ニ
 龍興井口城美濃ニアリ其將楢葉通朝氏家經國等
 屢龍興ノ失政ヲ諫ム龍興聽カス是歲八月通朝
 經國等龍興ニ畔シキ遂ニ殺ヲ信長ニ送ル信長
 乃テ三河ヲ攻ムルト声言シ兵ヲ聚メ帥テ西行
 シ以テ井口キヲ襲フ火ヲ放テ疾ク攻ム城兵惶駭

出ル所ヲ知ラス遂ニ出降ル乃チ龍興ヲ逐フ信
長既ニ尾張美濃ヲ定メテ徙テ井口ニ居ル井口
ヲ更タメ名テ岐阜ト云
二十二年二十五年武田信玄子義信勇敢善ク
戦ヒ將士多ク心ヲ帰スルヲ以テ之ヲ忌ミ其已
レニ傲ハンコトヲ恐レ庶子勝頼ヲ變ス勝頼因
テ義信叛ヲ謀ルト誣告ス信玄即チ義信ヲ囚ヘ
其親信ヲ誅シ遂ニ義信ヲシテ自殺セシム五月
三好義繼等將軍義輝ヲ攻メテ之ヲ弑ス是ヨリ
先キ長慶既ニ死ス叔父政康康長及ヒ岩成尤通

三好ノ三黨ト称ス松永久秀之ト謀リ長慶ノ喪
ヲ秘シ又義輝ヲ廢シテ義榮ヲ立ンコトヲ謀ル
時ニ義輝二條ノ第ヲ修ス徙リ居ル造營未タ全
ク成ラス三黨相謂テ曰ク機會失フ可カラスト
三黨及ヒ久秀等義繼ヲ奉シテ千餘人ヲ率ヒ清
水寺^{山城}ニ詣ルト宣言レテ以テ其備ヲ弛ヘシメ
四面ヨリ喊声ヲ揚テ攻メハル一府中大ニ擾乱
ス宿直ノ諸將急遽拒キ戦フ利アラス義輝曰ク
足利氏ノ運此ニ至テ窮マルト絶命ノ辞ヲ書シ
自カラ出テ防キ戦フ賊敢テ逼ラヌ池田某門扉

日本書紀 卷之三

ノ陰ヨリ躍リ出テ義輝ノ足ヲ斬リ之ヲ斃ス是
ニ於テ三黨義繼ヲ擁シテ高屋城河内ニ據リ以テ
義榮ヲ迎ヘ之ヲ立ツ尋テ征夷大將軍ニ任ス義
輝ノ弟覺慶一衆陪ノ主タリ義輝ノ弑セラル、
ヤ適レテ近江ニ走ル名ヲ義昭ト改ム
二十四年丙寅是ヨリ先キ毛利元就尼子
氏ヲ圖ルコト久シ嘗テ兵ヲ帥テ出雲ニ入り興
ニ戰フテホタ志ヲ得ル詭ハス既ニシテ尼子晴
久病死シ子義久嗣ク元就益進ミ戰フ既ニシテ
子隆元卒スルニ會ス元就軍氣ヲ沮喪センコトヲ

恐レ令シテ曰ク亡児ヲ吊セント欲スル者ハカ
戰セヨト自カラ將トシテ白鹿城出雲ヲ攻メ之ヲ
降シ進テ富田城出雲ニ逼ル十餘ノ寨ヲ起シテ圍
ミ攻ム城兵或降り或遁ル是歲七月義久終ニ保
ツ能ハサルヲ慮ハカリ速ニ城ヲ致シテ出テ降
ル元就乃チ一將ヲ留メテ富田ヲ守ラシメテ凱
旋ス元就既ニ大内尼子兩氏ノ地ヲ供セテ悉ク
山陰山陽十三州ヲ定メ元春隆景ヲシテ地ヲ西
南ニ畧セシム是ノ時ニ當リテ南海ニ長曾我部
河野氏アリ西海ニ大友嶋津龍造寺氏アリ

日本書紀 卷之三

二千二百二十七年^{丁卯}是ヨリ先キ三好ノ三黨義
 輝ヲ弑シ義榮ヲ立ツルヲ以テ功ヲ專ハラニシ
 テ常ニ得意ノ色アリ義継之ヲ惡ミ逃レテ久秀
 ニ歸ス久秀多門城^{大和}ニ據リ康長ヲ攻メテ之ヲ
 走ラス是ニ至ツテ義昭ノ近江ニアルヲ聞キ六
 角義弼ヲシテ義昭ヲ囚ラシム是歲北條氏康武
 田晴信ト兵ヲ合セテ止杉謙信ヲ攻メ火ヲ城下
 ニ放テ歸ル謙信取テ出テス謙信曩武藏ヲ窺フ
 未タ志ヲ得ル能ハス遂ニ氏康ト和ス
 二千二百二十八年^{戊辰}義昭近江ヲ逃テ若狹ニ走

リ武田義統ニ依ル又去テ越前ニ趣キ朝倉義景
 ニ依ル既ニシテ義景ノ以テ大事ヲ託スルニ至
 ラサルヲ知り四方ヲ顧ミルニ織田信長ニ如ク
 ハナシ七月潛カニ使ヲ信長ニ遣ハシ意ヲ諭ハ
 信長喜ビ乃チ義昭ヲ越前ヨリ迎ヘ岐阜ニ入ラ
 シム義昭託スルニ興復ノ事ヲ以テス信長答テ
 曰ク事固ニ難カラス幕下ノ為メニ京師ヲ定メ
 シコト必ス西月ヲ出テスト八月兵ヲ帥テ義昭
 ト共ニ西上シ近江ニ入ル六角義弼ヲ攻メテ之
 ヲ破リ直チニ進ンテ京師ニ向フ三好ノ三黨等

大ニ驚キ京師ヲ棄テ、遁去リ山城横津河内ノ
諸城ニ據ル信長速ニ京師ニ入ル天皇使ヲ下シ
テ信長ヲ慰勞ス信長柴田勝家等ヲ遣ハシ諸城
ヲ攻ム岩成左通降ル三好政康康長等敗走ル三
好義繼松永久秀嚮キニ三黨ト相思ミ先ツ歎ヲ
信長ニ送ル是ヨリ先キ將軍義榮既ニ薨ス十月
詔シテ義昭ヲ征夷大將軍ニ任ス信長ヲ從五位
下ニ叙ス既ニシテ信長岐阜ニ帰ル信長既ニ義
昭ヲ擁シテ畧近畿ヲ定メ頃ニ強大ヲ致シ顧ミ
テ武田上杉ニ氏ノ其後ヲ窺ハンコトヲ恐レ意

ヲ傾ケテ武田氏ニ結ヒ五ニ婚姻ヲ成シ季子勝
長ヲ送テ質トス是ニ於テ信玄織田氏ト和ヲ講
シ遂ニ今川氏ト絶ツ今川義元ノ死スルヤ子氏
真嗣ク氏真闇弱國人多ク服従セス信玄因テ以
テ駿河ヲ取ラシコトヲ謀リ十二月兵ヲ引テ駿
河ニ入リ八幡坂ニ軍ス氏真拒キ戰フテ敗走シ
掛川江ニ遁ル信玄留テ駿河ニアリ久能興津共ニ駿河
ノ二城ヲ築キ以テ北條氏ノ未救ニ備フ
二千二百二十九年己巳正月三好ノ三黨等信長ノ
在ラサルヲ伺ヒ万餘人ヲ以テ京師ニ入り義昭

ヲ本國寺ニ圍ム横津河内ノ諸將入り援フ賊兵
敗走ス時ニ信長岐阜ニアリ報ヲ得テ直チニ赴
キ援フ至ル片ハ既ニ平シ是月北條氏康兵ヲ駿
河ニ出シ今川氏ヲ救フ信玄興津ニ陣シ相持シ
テ未タ戰ハス信玄終ニ支フ可カラサルヲ度リ
夜ル軍ヲ救テ退ク氏真乃チ相模ニ走ル氏康氏
政兵ヲ分テ諸城ヲ守ラシム五月信長ニ條城ヲ
築キ義昭ヲシテ此ニ居ラシム時ニ京師屢兵亂
ヲ經テ宮闕大ニ壞ル信長命シテ之ヲ修治ス木
下秀吉ヲ留メテ京師ヲ護ラシム是時ニ當テ西

國ノ豪傑高橋宗像秋月ノ諸族大友氏ニ畔キ各
相雄張ハ大友義鎮屢之ヲ攻メ戰爭已入時ナレ
既ニシテ高橋等諸族皆毛利氏ニ属ス元就乃チ
元春隆景ヲシテ兵五万ヲ帥テ高橋等ヲ援ハシ
進テ立花城筑前ヲ攻メ之ヲ拔ク時ニ義鎮龍造
寺隆信ヲ佐賀ニ攻ム毛利氏ノ兵立花ニ追ルヲ
聞テ兵ヲ引テ還リ乃チ其將戸次鑑連吉弘鑑理
等ヲシテ兵ヲ帥テ赴キ援ハシム鑑連等隆景ト
大ニ多ク良川北ニ戰フ隆景利アラスシテ退キ
立花城ヲ保リ鑑連等進シテ立花ヲ圍ム相持シ

テホタ戦ハス時ニ大内輝弘寄寓シテ大友氏ニ
アリ義鎮因テ輝弘ニ兵五千ヲ給シ海路周防ニ
入り毛利氏ハ慮ヲ贖ハシム既ニシテ尼子氏ノ
遣臣山中幸盛等毛利氏ノ西方ニ事アルヲ伺ヒ
故ノ尼子誠父ノ子ヲ索メ立テ主トシ名ヲ勝
久ト改メ擁シテ出雲ニ入り數城ヲ取ル時ニ元
就出テハ長門ニアリ又コ聞テ大ニ愕キ元春隆
景ヲシテ師ヲ班サシム二將夜ニ衆シ城ヲ出テ
走ル大友ノ兵敢テ追ハス十月二將遠ニ引キ返
ル元就既ニ師ヲ班ヘシ輝弘ヲ逐フテ之ヲ殺ス

二千二百三十年庚午元龜ト攻元ス正月元春隆景
兵萬餘ヲ帥テ元就ノ孫輝元ヲ輔ケテ勝久ヲ攻
ム山中幸盛拒戦フテ敗走ス元春等進ミ戦フテ
末次城出雲ヲ陷ル既ニレテ元就疾アリ輝元隆景
帰ル元春留テ勝久ヲ攻ム四月織田信長越前ニ
入り朝倉義景ヲ攻メ手筒金崎二城ヲ取ル淺井
長政近江ニ起リ義景ニ應ス信長兵ヲ返ス六月
信長横山城近江ヲ攻ム城將急ヲ長政ニ報ス長政
援ヲ義景ニ乞フ義景族景健ヲシテ赴キ援ハシ
ム兵二万ヲ従セテ大寄山近江ニ陣ス信長夜ル大

三十三

寄山ノ炬火ヲ望ンテ曰ク是曉キニ乘レテ我ヲ
襲ハントスルナリト乃チ令ヲ下シ兵ヲ分テ十
三隊トシ坂井政尚池田信輝等ヲシテ先鋒トシ
以テ長政ニ當ル徳川家康其兵ヲ帥テ自カラ朝
倉氏ニ當ル兵ヲ引テ西ニ向フ天明姉川ニ至
リ北軍ト遇フ信輝等戰ヒ利アラス信長兵ヲ分
テ長政ノ横ヲ撃ツ長政敗走ス家康景健ヲ迎撃
ツ前鋒利アラステ走ル家康怒テ麾下ヲ以テ
左右翼ヲ縱チ夾ミ撃テ大ニ之ヲ破ル景健敗走
ス横山以下ノ諸城皆解ケ走ル家康ハ新田義重

ノ遠孫ナリ義重ノ父義國ハ源義家ノ子ナリ上
野ニ居リ新田足利ノ諸邑ヲ食ム義重因テ新田
ヲ以テ氏トス義重ノ第四子ヲ義季ト云徳川邑
野ヲ領ス因テ以テ氏トス義季五世ノ孫ヲ滿義
ト云時ニ宗子新田義貞後醍醐帝ノ詔ヲ奉ンテ
北條氏ヲ討ス滿義亦之ニ從フ北條氏既ニ滅ビ
足利尊氏及スルニ及ンテ官軍利ヲ失ヒ義貞戰
没ス義貞ノ子義興義宗義ヲ上野信濃ニ攀ルニ
及ンテ滿義ノ子政義政義ノ子親季亦從ヒ起ル
軍敗ル、ニ及ンテ遂ニ之ニ死ス親季ノ子ヲ有

日本書紀 卷之三

新田

親ト云義宗ノ子貞方ト俱ニ匿テ信濃ニアリ関
東ノ管領足利氏滿之ヲ覺リ兵ヲ遣ハレテ之ヲ
擊ツ有親貞方ト遁レテ陸奥ニ入ル氏滿大兵ヲ
帥ヒテ表リ擊ツ有親二子ヲ携テ上野ニ入り民
家ニ潜伏ス後僧尊觀ニ從テ容貌ヲ寔レ僧徒ノ
状ヲ為レ西シテ参河ニ至ル少子ヲ德壽ト云松
平村^河ノ長信重養テ子トス長スルニ及テ名ヲ
泰親ト命ス家ヲ松平村ニ築キ以テ父有親ヲ奉
ス泰親養父ノ職ヲ襲テ亦村長タリ後々州ノ目
代トナル遂ニ進テ参河守ニ任ス次子信光嗣ク

岡崎^河ニ居リ和泉守ト称ス信光男女四十餘人
ヲ生ム次子親忠嗣ク岩津^河ニ居ル親忠九男ヲ
生ム長子親長ヲ以テ岩津ヲ守ラシメ第三子長
親ヲ以テ嗣トシ安祥^河ニ居ル長親ノ長子信忠
嗣ク信忠ノ長子ヲ清康ト云清康徙テ岡崎ニ居
ル國人称シテ岡崎公ト云清康西参河ヲ定メ威
名日ニ顯ル美濃尾張ノ諸城主往々從ハント欲
スル者アリ清康西シテ尾張ニ入ラント欲ス叔
父信定事ヲ以テ清康ヲ怨ム清康西上スルニ及
テ信定從ハス慮ニ衆シテ亂ヲ為ント欲ス国老

安陪定吉清康ニ從テ軍中ニアリ屢書ヲ信定ニ
贈テ以テ之ヲ戒シム時ニ流言アリ定吉信定ト
謀ヲ通スト定吉子弥七ニ謂テ曰ク吾寃罪ヲ蒙
ル丰公必ス之ヲ察メン若シ察セラレスシテ誅
セラルハトモ汝慎テ怨ヲ為ス勿レト軍中馬逸
シ衆騷擾スルニ當テ弥七刀ヲ奉シテ清康ノ側
ニアリ以為ラク父定吉既ニ殺サルト急遽刀ヲ
拔テ清康ヲ弑ス植村榮安傍ヨリ弥七ヲ斬ル清
康ノ子廣忠嗣ク信定遂ニ自立ヲ謀ル定吉廣忠
ヲ奉シテ伊勢ニ走ル信定遂ニ上野ニ自立ス定

吉諸將ト謀リ援ヲ今川氏ニ乞フテ以テ廣忠ヲ
納ル信定事ノ成ヲサルヲ愿リ終ニ未リ謁ス廣
忠參河守ニ任ス信定己ニ卒レテ子清定上野ニ
據テ叛ス廣忠攻テ之ヲ降ス松平忠倫叛シテ織
田氏ニ降り輪田城河參ニ據ル廣忠刺客ヲ遣ハシ
テ之ヲ殺ス織田信廣代リテ輪田ヲ守ル廣忠援
ヲ今川氏ニ求ム義元質子ヲ徵ス廣忠乃チ子家
康ヲ以テ質子トシ駿河ニ赴カシム時ニ家康生
テ六歳途ニシテ織田氏ニ奪ハル既ニシテ廣忠
卒ス義元一將ヲ遣ハシテ田崎ヲ守ラシム時ニ

織田信秀既ニ没シ于信長嗣ク遂ニ今川氏ト和
ヲ結フ此ニ於テ家康岡崎ニ歸ル居ルコト十餘
日ニレテ往テ今川氏ニ質タリ家康幼ナルフ以
テ義元権リニ参河ノ国務ヲ領ス家康駿河ニ在
ルコト數年一日從容トシテ義元ニ謂テ曰ク僕
如ニレテ國ヲ離レ他邦ニ流寓スル既ニ年アリ
願クハ一タヒ歸テ先人ノ墳墓ヲ拜スルヲ得ン
ト義元之ヲ許ス是ニ於テ始テ岡崎ニ歸ル時ニ
弘治二年ナリ義元ノ織田氏ヲ攻ムルヤ家康義
元ノ為メニ大高城尾ヲ守ル既ニシテ義元敗死

ス家康岡崎ニ歸ル義元ノ子氏真昏懦ニシテ寵
臣政ヲ專ニシ家康ノ異心アルヲ諛ス氏真亦岡
崎ノ勢漸ク盛ナルヲ視テ心家康ヲ猜ム信長素
ヨリ天下ニ覇タラシト欲スルノ志アリ兵ヲ京
畿ニ出サント欲シテ武田北條氏皆其後ヲ窺フ
ヲ以テ未タ能ハス是ニ於テ信長使ヲ家康ニ遣
ハシ和ヲ求ム家康之ヲ許ス信長迎ヘ饗セント
欲ス家康尾張ニ赴キ信長ト盟フ武田信玄亦使
ヲ遣ハレ好ヲ修ント請フテ曰ク請フカヲ供テ
氏真ヲ滅シ大井川駿以東我之ヲ取ラン以西君

之ヲ取レト家康之ヲ許ス此ニ至テ信長長政ヲ
 攻メント欲シ使ヲ遣ハシテ援ヲ乞フ因テ兵ヲ
 出シ信長ヲ援フ是時信長既ニ近畿十餘州ヲ定
 メ家康ハ參河遠江ヲ定ム十月北條氏康卒ス子
 氏政嗣ク和ヲ信玄ニ求ム信玄氏政ノ今川氏真
 ヲ庇フヲ以テ之ヲ拒ク因テ氏真ヲ殺シテ以テ
 意ヲ表セシム氏真大ニ懼テ走テ家康ニ歸ス氏
 真家康ニ勸メテ謙信ト好ムヲ結ハシム謙信之
 ヲ許シ夾テ信玄ヲ攻メントトヲ約ス此ニ於テ
 信玄意ヲ決シテ家康ト絶シ十二月信長義景長

政ト和ス是ヨリ先キ信長ニ好ム三黨ヲ討ス義
 景長政其隙ニ衆シ京師ニ入ラントス信長之ヲ
 聞テ曰ク奴輩ヲシテ鞏下ヲ蹂躪セシムルハ我
 之恥ナリト乃チ遷テ京師ニ入ル時ニ義景長政
 ノ兵敷山ニ陣ス信長之ヲ攻ム僧徒ヲ諭シテ已
 レヲ助ケシメントス僧徒聽カス既ニシテ水木下
 秀吉舟羽長秀等兵ヲ帥テ來リ會ス信長ノ軍益
 張ル長政等懼レテ和ヲ請フ信長聽カス長政等
 乃チ將軍義昭ニ請フ義昭乃チ信長ノ營ニ至リ
 和ヲ講セント請フ信長乃チ之ヲ許ス各兵ヲ解

テ還ル

二千二百三十一年^辛六月毛利元就卒ス元春計
ヲ得テ哭^シ將士ニ謂テ曰ク葬莫ノ事隆景在
リ吾ハ當ニ敵ヲ世ボレ以テ靈魂ヲ慰ム可シト
急ニ攻テ未石城ヲ陷ル山中幸盛出降ル既ニシ
テ獲逃去ル元春進シテ新山^伯ヲ攻ム尼子勝又
出走ル遂ニ幸盛ト俱ニ信長ニ歸ス九月一向宗
ノ賊徒長嶋^伊勢ニ起ル信長勢多ニ陣シ諸將ヲシ
テ敷山ヲ焚シム諸將皆驚ク仇久間信盛等諫テ
曰ク昔シ桓武帝此寺ヲ建テ今幾千年王城ノ鎮

タリ今ニシテ之ヲ滅ス其レ之ヲ如何ン信長曰
ク吾國賊ヲ除クノミ初メ吾人ヲ遣ハシテ僧徒
ヲ諭ス彼服セス益山徒ヲ助ケテ玉師ニ抗ス是
國賊ナリ今ニシテ之ヲ除カスンハ其患ヲ貽ス
測ル可カラス圍テ之ヲ焚キ彼等ヲシテ遺類ナ
カラシメヨト諸將服従ス明日攻テ之ヲ焚キ僧
徒婦女老少トナク尽ク之ヲ斬ル是ヨリ先キ信
長皇宮ヲ修ム是歲落成ス
二千二百三十二年^壬申是ヨリ先キ家康好ヲ謙信
ニ通シ信玄ヲ夾ミ攻メンコトヲ約ス四月謙信

日本書紀

卷之三

三九

兵ヲ信濃ニ出レ以テ逸カニ家康ヲ援フ十二月
信玄進テ三形原江遠ニ陣レ以テ濱松城江遠ニ逼ル
家康出テ戰ハントス信長ノ將化又間信盛諫テ
曰ク信玄ハ老将ナリ輕レク戰フ勿レ家康曰ク
嚮キニ信玄小田原ヲ攻メ兵城下ニ逼ルト雖氏
氏康敢テ出テス世傳テ之ヲ笑フ今敵我城下ヲ
踏ム敢テ一矢ヲ發セサルハ丈夫ニ非スト諸將
固ク諫ム家康乃チ止ム既ニレテ信玄伴ハリ退
ク家康遂ニ出テ三形原ニ陣ス戰フテ甲斐ノ軍
ヲ却ク信玄乃チ奇兵ヲ以テ横サマニ家康ノ軍

ヲ撃ツ家康ノ軍擾乱ス信玄乃チ全軍ヲ驅テ徐
ク進ム鼓声山岳ニ震フ家康遂ニ大ニ敗レ濱松
ニ歸ル家康命シテ城門ヲ閉ク甲斐ノ軍北ルヲ
追テ城ニ逼ル城門閉サルヲ見テ伏ヲ恐レ敢テ
入ラス明日信玄退テ刑部江遠ニ陣ス
二十三年三月三日癸酉天正ト攻元正是ヨリ先キ
義昭信長ト隙アリ信長屢書ヲ以テ義昭ヲ諫ム
義昭憤懣遂ニ信長ヲ除カント謀ル二月義昭潜
カニ使ヲ發シテ信玄及ヒ謙信ニ諭シテ信長ヲ
夾ミ攻メンコトヲ約ス因テ石山堅田并ニ城

日本書紀 卷之三 三

キ兵食ヲ斂發ス信長之ヲ聞テ曰ク吾終ニ兵ヲ
用ヒサルヲ得スト諸將ヲ遣ハシテ勢多ヲ渡リ
石山堅田ヲ攻メシム自カラ出テ大津ニ至ル既
ニシテ石山降り堅田陷ル乃チ進テ京師ニ入り
和ヲ義昭ニ乞フ義昭聽カス二條城ヲ圍ム義昭
窮迫遂ニ和ヲ請フ信長乃チ帰ル四月武田信玄
卒ス子勝頼嗣ク是ヨリ先キ信玄野田城河ヲ攻
メ疾作テ帰ル是ニ至テ卒ス謙信之ヲ聞テ歎シ
テ曰ク世復此英雄男子アルヤ七月義昭再々ヒ
兵ヲ率ケ諸將ヲ留テ二條城ヲ守ラシメ自カラ

出テ榎鳴山ニ據リ宇治河ヲ阻テ阻メトス報知
岐阜ニ至ル信長即チ起テ直チニ馳セテ澤山江
ニ至リ夜ニ衆シテ朝妻渡江ヲ濟リ直チニ京師
ニ入ル義昭ノ兵勢多ヲ距ク者顧ミテ潰走ス信
長急ニ攻テ二條城ヲ陷ル城兵皆降ル乃チ其兵
ヲ以テ先鋒トシ榎鳴ニ向フ攻テ義昭ヲ破ル義
昭降ヲ請フ信長佐久間信盛木下秀吉ヲシテ之
ヲ處置セシム二人義昭ヲ若江河ニ徙ス此ニ於
テ織田氏遂ニ足利氏ニ代リテ令ヲ京師ニ出タ
ス村井貞勝ヲ以テ所司代トシ秀吉等ヲシテ斂

内ノ諸城ヲ抜カシメ自カラ岐阜ニ歸ル八月信
 長獲兵ヲ發シテ淺井長政ヲ伐ク月瀬城江述ヲ攻
 テ之ヲ抜キ進テ山田江述ニ陣ス朝倉義景兵二万
 ヲ率ヒテ長政ヲ援フ時ニ長政ノ將燒尾江述ヲ守
 ル者信長ニ降り信長ノ軍大ニ振フ所在響ノ如
 ク應ス義景懼テ遁レ去ル信長追撃シテ大ニ之
 ヲ破リ進テ敦賀前越ニ至ル義景自殺ス信長軍ヲ
 返シテ長政ヲ小谷城江述ニ攻メ遠ニ長政ヲ獲タ
 リ九月江述義継自殺ス是ニ於テ淺井朝倉六角
 義継ヲ攻ム義継自殺ス是ニ於テ淺井朝倉六角

三好氏皆滅ヒ近畿悉ク平ラク
 二千二百三十五年乙是ヨリ先キ徳川家康長椿
 城河ヲ修メ以テ奥平信昌ニ賜ヒ益守禦ヲ修テ
 武田氏ニ備ヘシム五月武田勝頼兵ヲ参河ニ出
 タシ長篠ヲ攻ム信昌急ヲ家康ニ報ス家康援ヲ
 信長ニ請フ信長之ヲ許ス家康騎卒二万ヲ帥ヒ
 信長兵五万ヲ合セテ来リ援フ撃テ大ニ勝頼ノ
 軍ヲ破リ其將山縣昌景馬場信房等ヲ獲ル斬首
 一万餘武田氏ノ宿將精兵大抵此役ニ盡ク八月
 朝倉氏ノ餘黨越前ニ起リ諸城ニ據ル信長自カ

ラ將トシテ討テ之ヲ平ラク
二千二百三十六年^{丙子}正月信長安土^江近ニ城ツキ
以テ謙信ニ備フ自カラ徙リテ之ニ居ル子信忠
ヲシテ岐阜ニ居ラシメ以テ勝頼ニ備フ四月大
坂一向ノ僧徒叛ス信長佐久間信盛等ヲ遣ハ
シテ之ヲ討ス尋テ親カラ將トシテ撃テ大ニ之
ヲ破ル是歲足利義昭備後ニ至ル毛利輝元之ヲ
納ル信長是ヨリ毛利氏ト兵ヲ構フニ至ル
二千二百三十七年^{丁丑}八月松永久秀信長ニ叛シ
テ大坂ノ賊ニ應ス初メ久秀ノ信長ニ降ルヤ信

長之ヲ殺中ニ辱シメテ曰ク此人ハ人ノ能シ難キ
所ヲ為スモノニタヒ公方ヲ弑スルナリ三好氏
ニ叛スルナリ大佛殿ヲ焼クナリト久秀汗ヲ流
シテ俯伏ス久秀是ヨリ意自カラ安セス久秀愛
スル所ノ茶鐺アリ信長之ヲ得ント欲ス久秀吝
テ獻セス是ニ至リテ遂ニ叛キ去リ志貴城^{大和}
據ル信長子信忠ヲ遣ハシ細川藤孝明智光秀等
ヲシテ信忠ヲ輔ケテ之ヲ討セシム城陷ル久秀
火ヲ放チテ自殺ス十月信長近畿畧定マルヲ以
テ山陽山陰ヲ畧セント欲シ羽柴秀吉ニ命シテ

西征セシム是ヨリ先キ秀吉柴田勝家丹羽長重
ノ威名ヲ慕ヒ自カラ氏ヲ羽柴ト改ム十一月秀
吉播磨ニ入り依用上月ノ諸城ヲ取ル尼子勝久
ヲシテ上月ヲ守ラシム城浮田直家ニ属ス直家
援ヲ毛利氏ニ乞フ
二千二百三十八年 寅 三月上杉謙信卒ス是より
先キ謙信書ヲ信長ニ贈テ曰ク公屢畿内ノ敵ト
戦フ未夕北人ノ技倆ヲ見ス請フ明養三月十五
日ヲ以テ八州ニテヲ攀テ西上レ公ト相見ン公
謙信ヲ視ルコト都人ト如クスルヲ勿レト

此ニ至リテ令ヲ八州ニ下レテ將ニ發セントス
信長大ニ懼ル既ニシテ謙信發スル前二日疾作
リ遂ニ卒ス織田氏ノ間諜越後ニ在ル者走り歸
リテ信長ニ報ス信長大ニ喜ヒ掌ヲ撫シテ曰ク
是ヨリ天下大ニ定ルト是ニ於テ信長佐久間信
盛前田利家依々成政ヲシテ兵ヲ帥ヒテ加賀能
登越中ニ入ラシム謙信既ニ死シ姪景勝嗣キ武
田勝頼ト和ス四月毛利輝元元春隆景ヲシテ兵
ヲ將ヒテ上月城ヲ圍ミ以テ浮田氏ヲ援フ信長
荒木村重ヲシテ秀吉ヲ援ハシム相持スル連月

東軍屢利ヲ失フ信長命シテ師ヲ班ス七月上月
 遂ニ陥イル勝久自殺ス山中幸盛出降ル尋テ殺
 サル既ニシテ直家潛カニ信長ニ通ス兵ヲ伏セ
 テ元春隆景ヲ擒ニセント欲ス謀漏ル元春隆景
 西ニ帰ル十月荒木村重信長ニ叛シテ伊丹津^イニ
 據ル初メ村重ノ臣事アリテ大坂ニ赴ク人村重
 ノ大坂ノ賊ト通スルヲ疑ヒ之ヲ信長ニ告ク信
 長信セス明智光秀村重ノ声續已レノ上ニ出ル
 フ嫉ミ百方之ヲ譏ス信長乃チ人ヲシテ村重ヲ
 詰ラシム村重驚愕信長ニ面謁シテ之ヲ陳謝セ

ント欲ハ光秀村重ヲ止メテ曰ク主公ノ怒リ犯
 ス可ラス足下必ス往ク勿レト村重乃チ伊丹ニ
 據テ叛シ毛利氏ニ應ス十一月信長自カラ將ト
 レテ村重ヲ討ス秀吉往テ村重ニ説キ圖ヲ攻メ
 シム村重聽カフ十二月信長進テ伊丹ヲ圍ム克
 タス信長兵ヲ損センコトヲ慮カリ長圍ノ策ヲ
 為シ池田信輝蒲生氏郷等ヲ留メテ之ヲ守ラシ
 ノテ自カラ安土ニ還ル時ニ別所長治亦叛シテ
 三木城^三ニ據リ毛利氏ニ通ス秀吉之ヲ圍ム赤
 克タス長治村重ト互ニ相應援ス是歲大友義鎮

嶋津義久十耳川^川ニ置^置テ敗績ス初メ義鎮九
州探題タリ七國ヲ領^領テ威鎮西ニ振^振テ嚮^嚮キ
ニ日向ノ伊東祐^祐立^立義久ノ攻ムル所トナリ走リ
テ大友氏ニ頼^頼ル其兵ヲ假^假リテ以テ日向ヲ復^復セ
ント欲^欲ス此ニ至^至リテ義鎮遂^遂ニ兵ヲ發^發シテ祐立
ヲ日向ニ納^納レントス一戰敗^敗其精兵多ク死^死ス
大友氏ノ威遂^遂ニ衰^衰フ
二千二百三十九年^卯正月長治出^出テ秀吉ヲ襲^襲フ
秀吉迎^迎ヘ撃^撃テ大ニ之ヲ破^破ル長治退^退テ復^復三木城
ニ入^入ル秀吉乃チ多ク寨ヲ築^築テ糧^糧藁ヲ絶^絶ツ九月

信長復^復伊丹ニ赴^赴ク村重夜^夜ル伊丹ヲ逃^逃レテ華隈
津^津ヲ保^保テ援^援兵ヲ毛利氏ニ乞^乞フ毛利氏辞^辞スルニ
津路梗^梗塞^塞ヲ以テス既^既ニシテ伊丹城中信長ニ通
スル者アリ信長ノ兵乃チ入^入リ保^保ツ十二月荒木
氏ノ族三千餘人ヲ誅^誅ス楯津ヲ以テ池田信輝ニ
賜^賜ヒ因^因テ華隈ヲ攻^攻ンレメ遂^遂ニ之ヲ陷^陷イル村重
走^走リテ毛利氏ニ依^依ル
二千二百四十年^辰正月秀吉三木ヲ攻^攻ムル益^益急
ナリ長治自殺^{自殺}シテ以テ士卒ノ死ヲ宥^宥メント請^請
フ秀吉之ヲ許^許ス長治火ヲ放^放チテ自殺^{自殺}ス三木陷

イリ播磨悉ク平ラク遂ニ進テ但馬因幡ノ諸城
ヲ下タス是歲詔シテ大坂僧徒ヲシテ信長ト和
セシム僧徒乃チ城ヲ信長ニ致ス
二千二百四十二年^{壬午}二月信長子信忠ト兵十二
万ヲ師ヒテ武田氏ヲ伐ツ信忠進シテ信濃ノ諸
城ヲ陷イル三月甲斐ニ入ル徳川氏及ヒ北條氏
各兵數万ヲ師ヒテ来リ會ス勝頼拒戦フ能ハス
道レテ天目山^{甲斐}ニ棲ム將士離叛シテ兵僅カニ
四十人織田氏ノ將瀧川一益等四面ヨリ圍ム攻
ム遂ニ勝頼及ヒ其子信勝ヲ獲タリ武田氏滅フ

信長甲斐信濃駿河上野ヲ分割シテ有功ノ將士
ニ與フ一益ヲ以テ関東ノ管領トシ因テ柴田勝
家等ヲシテ一益ト相應授シテ以テ上杉氏ヲ圖
ラシム遂ニ安士ニ歸ル此時ニ當リ秀吉高松城
中ヲ圍ム毛利輝元數万騎ヲ師ヒテ来リ援フ秀
吉使ヲ馳セテ援軍ヲ信長ニ請フ五月信長大ニ
兵ヲ徵シ池田信輝明智光秀等ヲシテ先ツ發セ
シメ信長子信忠ト繼キ進シテ京師ニ至リ本館
寺ニ謁ス信忠別寺ニ謁ス六月光秀其君信長ヲ
弑ス初メ信長將士ニ遇スル禮節ヲ設ケス屢事

ニ因テ光秀ヲ罵辱ス光秀自カラ意フ信長已ニ
ヲ殺サント欲スト信長森蘭丸ヲ罷ス信長嘗テ
蘭丸ニ謂テ曰ク三歳ノ後志賀郡ヲ以テ汝ニ與
ヘン小時ニ志賀郡ハ光秀ノ領ナリ光秀聞テ自
カラ疑フ我ノ誅セラルハハ三歳ノ後チニアル
カト此ニ至リテ信長ノ命ヲ受テ徳川家康ヲ饗
セントシ周旋甚ク勤ム俄カニシテ西征ノ命ア
リ光秀大ニ恚リ饗具ヲ湖中ニ投シテ去ル此ニ
於テ始テ謀叛ノ心アリ光秀既ニ安土ヲ發シ遂
ニ丹波ニ入り變宕山祠ノ下ニ宿ス卒然傍人ニ

問テ曰ク本誌寺ノ溝深リ幾尺アルヤト致問テ
之ヲ異シム既ニシテ光秀從子光春及ヒ其將齊
藤利三等ニ謂テ曰ク汝等誌ク我カ為メニ死セ
ンヤ然ラサレハ速カニ吾頭ヲ斬レ皆曰ク唯命
ニ是從ハン光秀曰ク右府吾ヲ殺サントスル者
數タヒ吾將ニ先ツ發セントスト光春等諫メン
ト欲ス然レ光秀ノ意已ニ決スルヲ視テ乃チ其
謀ヲ賛成ス是ニ於テ丹波ノ兵ヲ悉シテ發ス宜
言シテ曰ク命ヲ奉シテ西秀吉ヲ援フ夜ル大江
山波ヲ經テ老坂波ニ至ル路分レテニトナル右

日本書紀 卷之三 三十三

スレハ則備中道ナリ光秀乃チ尤シテ馳ス士卒
皆異シハ既ニ進シテ桂川^山ヲ渡リ光秀颯言シ
テ曰ク敵ハ本館寺ニ在リト衆始メテ其救スル
ヲ知ル黎明本館寺ヲ襲フ信長驚起テ曰叛スル
者誰リ森蘭丸出テ其旗ヲ視ル報シテ曰光秀ナ
リ信長大怒水ヲ手ニシテ出ツ蘭丸以下拒戦
フ信長射テ賊數人ヲ斃シテ強絶ツ槍ヲ執テ戦
フ右脇ヲ傷ツク乃チ火ヲ放テ自殺ス蘭丸以下
百餘人皆力戦シテ死ス信忠凌ヲ聞キ馳セテ本
館寺ニ赴ク途煙燄天ヲ蔽フ望見テ馳テ二條城

ニ赴ク俄カニシテ光秀来リ圍ム信忠拒キ戦ソ
テ利アラズ亦自殺ス從兵皆死シ一人モ遁
者ナシ信忠ノ子三法師岐阜ニアリ信忠前田玄
以ニ遺命シテ之ヲ擁護セシム玄以乃チ岐阜ニ
赴キ三法師ヲ奉シテ清洲ニ入ル信長爵從二位
ニ叙シ官右大臣ニ任ス常ニ四方ヲ平定スルヲ
以テ志トス廷臣嘗テ征夷大將軍タラレコトヲ
勸ト信長曰ク吾何ノ室町氏ノ故蹄ヲ襲ハシヤ
ト人ヲ知リ善任シ政偏私ナシ然レ性猜忍下ヲ
馭スル嚴酷ニ過ク以テ禍ニ及フ惜ヒカナ徳川

家康將ニ大坂ヨリ京師ニ赴カントス途ニシテ
變ヲ聞キ直キニ京ニ入り光秀ヲ討セントス本
多忠勝衆寡敵セサルヲ以テ之ヲ止ム家康乃チ
間道ヨリ伊勢ヲ経テ参河ニ歸ル光秀既ニ京師
ヲ定メ安土ヲ取ラント欲ス安土城中凌閣ヲ得
テ上下大ニ擾レ諸將士多逃亡ス蒲生賢秀安土
ヲ留守ス乃チ夫人ヲ奉シテ其邑日野ニ奔ル光
秀遂ニ安土ヲ取り復京師ニ赴ク此時ニ當リテ
羽柴秀吉高松城ヲ圍ム毛利氏下相持ス輝元秀
吉ノ援兵將ニ至ラントスルヲ聞キ和議ヲ請フ

秀吉之ヲ許ス將ニ共ニ盟ヲ成サントス適水能
寺ノ變報至ル秀吉大ニ驚キ未タ宣言セス秀吉
自カラ度ル事終ニ秘ス可カラス寧口我ヨリ之
ヲ發セント乃チ輝元ノ使者ニ告ルニ變故ヲ以
テシテ曰ク事已ニ此ニ至ル公等猶和セント欲
スルヤ我ヲ擊ント欲セハ今日ニ若ハナシト使
者復命ス輝元大ニ喜ヒ諸將ト會議ス諸將皆曰
信長死シ軍氣沮廢ス此時ニ乘シテ之ヲ擊タハ
秀吉ヲ獲ニコト必セリ隆景獨リ從ハスレテ曰
ク信長ハ死スルハ蓋シ天秀吉ニ幸スルナリ應

テ之ヲ掃蕩セントス吾秀吉ヲ視ルニ此人ニ非
サルヲ得シヤ余其言ヲ聞クニ常人ノ及フ所ニ
非ラス其量誠ニ測ル可カラス今和成ラントシ
テ彼ノ寔アルヲ幸トシ之ト戦フ彼直我曲彼必
ス敢死未リ戦ハン未夕勝ヲ必ス可カラス吾ヲ
以テ之ヲ計ルニ和議ヲ成スニ若クハナシト輝
元之ニ從フ乃チ使ヲ遣ハシ喪ヲ弔シ且ツ好フ
修ム是ニ於テ秀吉選テ光秀ヲ討ス兵ヲ引テ途
ニ上リ尼崎^撰津^撰ニ至ル是時ニ當リ信雄信孝其他

織田兵ノ公族將師觀望敢テ先ノ討賊ノ師ヲ發
スル者ナシ秀吉兵ヲ引テ倫中ヨリ至ルト聞キ
皆大喜ヒ乃チ尼崎ニ會シ戦ヲ議ス高山友祥先
鋒タリ中川清秀之ニ次ク池田信輝丹羽長秀又
之ニ次ク信孝其後ヘニアリ秀吉後拒タリ光秀
秀吉ノ至ルヲ聞キ大ニ駭キ自カラ^{洞嶺}河^内ニ至
リ遂ニ進ンテ淀城^山ニ入ル翌黎明秀吉諸將ヲ
統ヘ至リ光秀ト山崎^山ニ戦テ大ニ之ヲ破ル光
秀走リ勝龍城^山ニ入ル秀吉ノ軍從テ之ヲ圍ム
數重城兵稍々散亡シテ餘ス所僅カニ百人光秀

夜ニ架シテ十餘騎ト圍ヲ潰シテ北ニ走リ小粟
樓^山ニ至ル土兵四モニ起リ林中ヨリ槍ヲ以テ
光秀ヲ刺ス光秀馬ヨリ墜テ死ス光秀ノ徒子光
春走リ湖ヲ渡テ自殺ス齋藤利三捕ヘラレ誅ニ
伏ス秀吉乃チ信長ノ屍ヲ政テ之ヲ葬リ捷ヲ朝
廷ニ奏ス光秀ノ首ヲ本能寺ニ梟ス信長ノ死ヲ
距ルコト十有三日秀吉威京畿ニ震フ朝廷其功
ヲ嘉シテ從四位ニ叙シ右近衛中將ニ任ス秀吉
辞シテ拜セズ秀吉信長ノ繼嗣未タ定サルヲ以
テ諸將ト清洲ニ會ス柴田勝家越中ヨリ龍川一

益關京ヨリ前田利家能登ヨリ丹羽長秀若狹ヨ
リ皆兵ヲ收メテ清洲ニ至ル三法師信長ノ嫡孫
ナリ以テ立テ嗣トシ名ヲ秀信ト改メ安土ニ居
ラシム信雄尾張ヲ領シ信孝美濃ヲ領シ諸將織
田氏ノ地ヲ分領ス而シテ秀吉ハ既ニ自カラ播
磨但馬因幡丹波諸州ヲ畧定シ皆之ヲ有ス是以
テ其分地ヲ受ケテ十月詔シテ秀吉ヲ以テ從五
位下ニ叙シ右近衛少將ニ任ス秀吉國最富ミ兵
最強シ自カラ持ス頗ル珍貴ナリ信孝之ヲ惡ミ
以為ラク我家不幸ニシテ變故ニ遭ヒ我家ノ奴

日本畧史 卷之三

葦長ヲ舎テ幼ヲ立テ以テ争テ遺地ヲ領取ス吾
レ信雄ト同年生但月日少シク後ル、ヲ以テ兄
弟ノ名アルノミ況ンヤ復仇ノ功吾與リテカア
リ秀吉盜ニテ以テ專ラ已レノ功トス篡竊ノ勢
既ニ成ル今之ヲ除カスハ他日復之ヲ制ス可
カラスト乃チ勝家一益ト秀吉ヲ除カントラ
謀ル秀吉之ヲ聞テ乃チ信雄ニ結ヒ急ニ兵ヲ發
シテ信孝ヲ岐阜ニ攻ム岐阜兵寡シ信孝伴ハリ
テ和ヲ請ツ秀吉乃チ帰ル勝家越前ニ在リ出テ
信孝ヲ援ハント欲ス雪ニ阻テラレ出ルコト欲

ハズ一益勝家ニ教ヘ伴ハリテ和シテ明年ヲ待
テ之ヲ夾ミ攻メントス勝家之ニ從ヒ前田利家
ヲシテ秀吉ニ至ラシメ憾ヲ解キ共ニ幼主ヲ輔
ケンコトヲ請フ秀吉之ヲ許ス秀吉其計ヲ知り
以為ラク吾且ツ勝家ノ膽ヲ破ラント兵ヲ引テ
長濱^近ヲ攻ム勝家ノ義子勝豐長濱ヲ守ル秀吉
ヲ迎ヘ降ル秀吉城堡ヲ修メ越前ノ要路ヲ絶ツ
二千二百四十三年^癸正月秀吉兵七万ヲ部シテ
三道ヨリ伊勢ニ入り一益ヲ長嶋^伊ニ攻ム勝家
之ヲ聞キ兵ヲ發シテ南出シ依久間盛政ヲシテ

日本書紀 卷之三 五十三

出テ柳瀬江^近ニ陣セシム秀吉諸將ヲ留メテ一益
ニ備ヘ自カラ諸軍ヲ引テ柳瀬ニ赴ク連珠ノ岩
ヲ築キ自カラ長濱ニ屯ス三月勝家兵ヲ引テ柳
瀬ニ至ル秀吉ノ兵敢テ出戦ハス四月信孝兵ヲ
舉テ勝家一益ニ應ス秀吉其軍ヲ以テ信孝ヲ攻
メ大垣ニ至ル盛政赴キ援ハントシ秀吉ノ諸砦
相連續シテ道路通セサルヲ恐ル山路將監盛政
ニ語テ曰ク敵ノ諸壘皆固シ獨リ中川清秀ノ壘
賤岳^近ノ麓ニアリ其備固ラス其不意ヲ擊ハ必
ス勝ン盛政之ニ從ヒ夜ニ衆シテ賤岳ニ至ル清

秀高山友祥ト數千人ヲ以テ出戦フ盛政之ヲ破
ル清秀苦戦シテ死ス盛政已ニ勝チ意太ク驕ル
勝家之ヲ召還ス盛政肯セス是時ニ當リ秀吉將
ニ岐阜ヲ圍マントス既ニレテ報至ル秀吉使者
ニ問テ曰ク盛政退クヤ答テ曰ク未タレ秀吉躍
躍シテ曰ク吾大勝ヲ得タリト即チ堀尾吉晴等
ヲ留メ自カラ兵一万五千ヲ提ケテ疾馳セテ賤
岳ニ赴ク盛政大ニ驚キ兵ヲ引テ岳北ニ陣ス秀
吉進ンテ盛政ヲ撃ツ加藤清正福嶋正則加藤嘉
明平野長泰脇坂安治糟屋武則片桐且元先ヲ爭

フテ奮戰遂ニ大ニ盛政ヲ破ル盛政敗走ス斬首
五千世ニ之ヲ賤岳ノ七槍ト云勝家敗報ヲ得テ
大ニ驚キ走テ北莊^{越前}ニ入ル秀吉追テ北莊ニ至
リ盛政等ヲ獲タリ城ヲ圍ム數重勝家寡ヲ設ケ
將士ト訣飲シ慷慨シテ曰ク吾先君ノ恩ニ報セ
ント欲シ終ニ後面藤吉ノ困レムル所ト為ル豈
天ニ非スヤ遂ニ火ヲ放テ自殺ス秀吉遂ニ進シ
テ加賀能登ノ諸城ヲ攻メテ悉ク之ヲ下ス是時
ニ當リ信雄岐阜ヲ攻ム城兵皆潰ニ信孝出走ル
信雄迫リテ自殺セシム一益秀吉ニ降ル秀吉之

ヲ近江ニ放ツ六月詔シテ秀吉ヲ從四位下ニ叙
レ參議ニ任ス七月大ニ戰功ヲ賞ス是ニ於テ近
畿粗定ル十一月秀吉大坂城ヲ築キ徙リテ之ニ
居ル是歲龍造寺隆信鳴津義久ト有馬^{肥前}ニ戰フ
テ敗死ス時ニ龍造寺氏肥前ニアリ鳴津氏薩摩
ニアリ大友氏豊後ニアリ共ニ鎮西ニ雄張ス而
シテ大友龍造寺ニ氏漸ク衰弱シテ鳴津氏勢益
張ル
二十二年百四十四年^{甲申}信雄秀吉ノ威雄益盛ナル
ヲ視テ心平ラカナル能ハス秀吉亦信雄ヲ除カ

シト欲ス信雄三騎將アリ秀吉故ラニ厚ク之ヲ
遇ス信雄意益安セス三月遂ニ三將ヲ殺シ秀吉
以テ絶チ援ヲ徳川家康ニ求ム家康兵ヲ發シテ信
雄ヲ助ク兵二万ヲ合セテ小牧_張ニ軍ス秀吉十
二万人ヲ以テ大_尾山_張ニ軍ス池田信輝森長可_張堀
秀政瀧川一益等亦秀吉ニ應ス四月家康大ニ秀
吉ノ兵ヲ長_張湫_張ニ破リ池田信輝森長可ヲ獲タ
リ六月秀吉大坂ニ歸リ家康参河ニ歸ル十月秀
吉人ヲレテ和ヲ信雄ニ請シム信雄之ヲ許ス家
康使ヲ遣ハシ和成ルヲ賀ス信雄家康ニ節ノテ

亦秀吉ト和ヲ結ハシム家康乃チ子秀康ヲ大坂
ニ送ル秀吉大ニ悦ビ羽柴氏ヲ称セシム
二十二年百四十五年_{酉乙}二月秀吉正二位ニ叙シ内
大臣ニ任ス五月秀吉羽柴秀長秀次ヲシテ舟師
六萬ヲ帥ヒテ長曾我部元親ヲ土佐ニ伐ツ初メ
元親四國ヲ并吞シ遂ニ南海ニ雄タリ秀吉書ヲ
以テ元親ニ諭シ京師ニ朝セシム元親聽カス此
ニ至リ遂ニ之ヲ伐ツ將田秀家小早川隆景共ニ
ニ師ヲ率ヒテ之ニ會ス攻テ諸城ヲ陷イル元親
乃チ降ヲ乞フ南海悉ク定マル元親ノ三州ヲ削

リ諸將ニ分與ス七月秀吉関白ニ拜ス姓豊臣ヲ
 賜フ物メ秀吉微賤ヨリ起リ姓氏ナキヲ以テ自
 カラ平氏ヲ称ス此ニ至リ征夷大將軍タラント
 ヲ欲ス或秀吉ニ謂テ日夕故事大將軍ハ源氏ニ
 非レハ不可ナリ公宜シク関白トナル可シ秀吉
 喜フ遂ニ詔シテ関白ニ任ス八月秀吉兵十方ヲ
 師ヒテ越中ニ入り佐々成政ヲ攻メテ之ヲ降シ
 進ンテ越後ニ入り上杉景勝ト盟フ
 二千二百四十六年丙戌二月秀吉第ヲ内野山ニ築
 ク名ケテ聚樂ト云四月秀吉其妹ヲ以テ家康ニ

妻ハス初メ信濃ノ豪族真田昌幸歟ヲ秀吉ニ送
 ル真田氏曾テ武田氏ニ属ス武田氏滅ヒテ徳川
 氏ニ属ス後チ北條氏ヲ攻メテ沼田上野ヲ取ル徳
 川氏北條氏ト婚スルニ及ンテ家康昌幸ニ諭シ
 テ沼田ヲ北條氏ニ還サシム昌幸聽カス家康怒
 テ之ヲ攻ム上杉景勝秀吉ノ旨ヲ以テ兵ヲ發シ
 テ昌幸ヲ援フ秀吉信雄ト謀テ白ク吾既ニ中州
 ヲ定ム東西未タ服セス今將ニ西伐セントス實
 シク家康ト和シ以テ北條氏ヲ距ク可シト信雄
 乃チ使ヲ遣ハシ家康ニ諭ス使者三反スレトモ

家康聽カス遂ニ婚嫁ノ事ヲ陳ス此ニ至リテ家
康乃チ之ヲ許ス北條氏直之ヲ聞キ意頗ル危懼
ハ五月上杉景勝入朝ス是ヨリ先キ大友義鎮亦
入朝ス初メ島津義久九國ヲ荐食ス義鎮及龍造
寺政家並ヒニ接ヲ秀吉ニ請フ岩屋前ノ城主高
橋鎮種立花前ノ城主立花宗茂皆歟ヲ秀吉ニ送
ル此ニ於テ秀吉將ニ西島津氏ヲ伐ントス七月
義久筑前筑後ヲ畧シ乃チ岩屋ヲ攻ム城陥イリ
鎮種自殺ス義久兵ヲ移シテ立花ヲ攻ム宗茂固
守ル義久終ニ退キ去ル八月秀吉毛利輝元長曾

我部元親等ニ令レテ兵ヲ西海ニ出サレム又仙
石秀久ヲ遣ハシ義久ヲ招諭ス義久聽カス秀久
大友氏ノ兵ヲ以テ義久ヲ撃ツ戦ヒ剌アラス義
久大舉豊後ニ入ル時ニ大友義鎮既ニ死ス子義
統出戦アテ敗走ス十月家康京師ニ至リ秀吉ヲ
見ル十一月天皇位ヲ皇太孫ニ禪ル皇太孫立ツ
是ヲ後陽成天皇トス十二月秀吉ヲ以テ太政大
臣ニ任ス關白故ノ如シ
二十二年四月十七年丁秀吉大舉西伐ス二月兵大
坂ニ集ル者十五万人乃チ秀長ヲシテ前軍ヲ師

先以發セシム三月秀吉自カラ大軍ヲ師ヒテ
京師ヲ發シ水陸俱ニ進ム秀長既ニ豊前ニ至ル
義久子家久ヲレテ耳川ヲ守ラシム秀長進シテ
耳川ニ至ル家久退テ高城日向ヲ保ツ既ニシテ又
退ク秀吉海ヲ濟リ豊前ニ入ル四月秋月種實ヲ
攻テ之ヲ降ス龍造寺政家兵ヲ以テ未リ會ス進
ンテ肥後ニ入ル諸城解走ル遂ニ進ンテ薩州ニ
入ル嶋津氏ノ諸將義久ニ勸メテ降ヲ乞ハシム
義久乃チ伊集院忠棟ヲ遣ハシ秀長ニ因テ罪ヲ
謝シ降ヲ乞フ秀吉之ヲ許ス義久髮ヲ削リ僧衣

ヲ被テ出テ降ル秀吉延見ル命レテ子義弘ヲ以
テ嗣トス六月秀吉軍ヲ還シ太宰府ニ至ル大ニ
功罪ヲ論シ嶋津氏ヲレテ薩摩大隅日向ヲ領セ
シメ其侵地ヲ削ル肥後ヲ佐々成政ニ筑前ヲ小
早川隆景ニ豊前ヲ黒田孝高森勝信ニ筑後ヲ毛
利秀包立花宗茂ニ賜フ其他皆旧領ヲ復ス龍造
寺氏ノ族鍋嶋直茂國事ヲ扱ス政家卒スルニ及
ンテ乃チ直茂ヲ立ツ此ニ於テ西國悉ク平ラク
七月秀吉京師ニ復命ス是歲西海諸侯皆國ニ就
ク佐々成政肥後ニ至ル下ヲ治ムルコト能ハス



士民皆叛シ國內大ニ擾ル年ヲ踰ヘテ粗定マル
秀吉之ヲ讓テ遠ニ死ヲ賜フ肥後ヲ以テ加藤清
正小西行長ニ分賜シ是歲琉球入貢ス
二十二年百四十八年_子正月秀吉奏シテ臨幸ヲ請
フ四月天皇褒樂第ニ幸ス秀吉文武百官ヲ率ヒ
テ扈從ス駕駐マル五日ニシテ宮ニ還ル五月秀
吉使ヲ遣ハシ北條氏直ヲ諭レテ入朝セシム氏
直答ヘス是時氏政已ニ老シ子氏直嗣ク然ル事
皆氏政ニ決ス
二十二年百四十九年_巳七月復北條氏ヲ諭ス答ヘ

ス時ヲ東北ノ豪傑皆争テ使ヲ遣ハシ秀吉ニ從
フ獨リ伊達政宗陸奥出羽ニ據リ肯テ降ラス
二十二年百五十年_寅二月秀吉大舉北條氏ヲ伐ツ
兵凡ソ二十五萬徳川前田上杉諸將ヲレテ先發
セシム三月秀吉自カラ大軍ヲ帥ヒテ東ス氏政
兵ヲ分テ諸城ヲ守ル秀吉織田信雄蜂須賀家政
等ヲシテ進山ヲ攻メ秀次及ヒ堀秀政等ヲシテ
山中城ヲ攻メシム山中城遂ニ陷イル四月秀吉
長驅シテ小田原ニ至ル城中大ニ懼ル北條氏ノ
將諸城ヲ守ル者皆解走リ小田原ニ入ル諸將密

日本書紀 卷之三
六十

ニ秋ヲ秀吉ニ送ル者アリ氏政氏直未夕之ヲ知
ラス秀吉諸軍ニ令シテ城ヲ圍マシム前田上杉
等別ニ兵ヲ武藏上野上總安房ニ出シ諸城ヲ攻
メテ之ヲ陷イル而シテ小田原孤立固ク守リテ
下ラス秀吉故サラニ日夜置酒宴會持久ノ意ヲ
示ス城兵大ニ困シム伊達政宗箱根ニ至リ家康
ニ因テ降ヲ乞フ秀吉延見テ其久シク未帰セサ
ルヲ責ム政宗唯々敢テ仰視ルコト能ハス秀吉
命シテ國ニ帰ラシム是時ニ當リ小田原城圍ヲ
受ル數月北條氏ノ將款ヲ送ル者頗ル多シ是ヨ

リ城中人々相殺フテ逃亡相踵ク七月氏直遂ニ
降ヲ乞フ秀吉之ヲ許シ氏政ヲシテ城ヲ致シテ
出テシム使ヲ遣ハシテ氏政ニ死ヲ賜フ氏直以
下ヲ高野ニ放シ八月蒲生氏郷ニ賜フニ會津十
一郡ヲ以テシ以テ東北ヲ鎮撫セシム北條氏ノ
故地八州ヲ以テ家康ニ賜フ九月西歸京師ニ復
命ス是ニ於テ東國悉ク定マル
二千二百五十一年辛十一月秀吉奏請フテ秀次
ヲ以テ関白ニ任シ自カラ太閤ト稱シ是歳宗義
智ヲシテ朝鮮ニ至ラシメ明國ヲ攻ムルノ意ヲ

日本書紀 卷之三 空

王李躬ニ諭レ導レテ明ニ入ラレシム李躬從ハス
是ニ於テ秀吉諸將ニ謀リ西征ヲ決レ令テ諸道
ニ下シ大ニ兵食ヲ脩ヘシム是ヨリ先キ信長秀
吉ヲ西征大將トシ中國ヲ伐レシム信長曰ク功成
ラハ中國ヲ舉テ汝ニ授ケン秀吉拜シテ對テ曰
ク臣敢テカラ竭サ、ランマ臣ノ微カラ以テ幸
ニ中國ヲ定メハ君以テ功臣ノ未々賞ヲ受ケサ
ル者ニ與ヘヨ臣ハ則チ直チニ進ンテ九州ヲ定
ムン願クハ其一歳ノ入ヲ賜ヘ糧伏ヲ蓄ヘ舟楫
ヲ造リ海ヲ濟リテ朝鮮ニ入ラレ君願クハ臣ニ

賜フニ朝鮮ヲ以テセヨ臣朝鮮ノ兵ヲ用ヒテ大
明ニ入り庶幾クハ君ノ威靈ニ依リテ明國ヲ席
卷シ三國ヲ合セテ一ト為ン是臣ノ宿志ナリト
後常ニ其志ヲ成サント欲ス是ニ至リ明主政ヲ
失ヒ武備廢弛スルヲ聞キ益之ヲ窺ハント欲ス
朝鮮我命ニ從ハサルニ及ンテ意益決シ遂ニ諸
將師ヲ會シ其意ニ語ル諸將皆驚ヒテ敢テ答フ
ル者ナレ侍田秀家進、テ曰殿下此大事ヲ舉ル
誰カ努カセサラン議乃チ決ス諸將ヲ遣ハシ國
ニ就キ各兵食ヲ脩ヘシム秀吉ノ母大廳秀吉ノ

海外ニ赴クヲ聞テ大ニ之ヲ憂ヘ痕食ヲ廢スル
ニ至ル乃チ議シテ秀家ヲシテ代リ往カレメ自
カラ出テ肥前名古耶ニ陣セシトス
二千二百五十二年辰文祿ト改元以二月秀吉京
師ヲ發ス四月名古耶ニ至ル諸軍會スル者五十
萬人分テ八軍トシ韓ノ八道ニ向フ浮田秀家元
帥タリ加藤清正小西行長各一軍ヲ率ヒテ送ヒ
ニ先鋒タリ別ニ水軍ヲ置ク水陸九軍總テ十五
萬人大礮ヲ發シテ帆ヲ揚ク勝水壺岐ニ至リ風ニ
阻テラル、十日行長宗義智ト素ヨリ海路ヲ

諳ニス潜カニ其軍ヲ抜キ風濤ヲ破リテ進ム清
正之ヲ知リ怒テ發ス風益甚クシテ進ム能ハス
行長終ニ金山ニ達シ攻テ守將鄭撥ヲ斬ル進シ
テ諸城ヲ拔キ遂ニ東萊ヲ陷イル清正行長ニ後
ル、三日ニシテ金山ニ至ル行長己ニ進ムヲ聞
キ切齒シテ曰ク悔ニラクハ監子ニ先ンセラル
ト乃チ別路ヲ取り慶州ヲ攻メ之ヲ抜キ轉戦シ
テ進ム向フ所皆靡ク秀家諸軍ヲ師ト相繼テ陸
ニ上ル五月清正行長道ヲ分テ國都ヲ攻ム朝鮮
王世子ト平壤ニ走リ使ヲ馳ヒテ急ヲ明ニ告ク

我軍國都ヲ取ル十餘日ニシテ諸軍悉ク國都ニ
集マル秀家自カラ國都ニ居リ諸將ヲシテ進取
ヲ圖ラシム清正ハ威鏡道ヨリ行長ハ平安道ヨ
リシ其他ノ諸將道ヲ分テ進ム朝鮮王金命元等
ヲ留メ平壤ヲ守ラシメ自カラ威鏡ニ走ラント
ス清正ノ在ルヲ聞キ轉シテ義州ニ走ル行長進
ンテ大同江ニ至リ金命元ト江ヲ夾ンテ相持ス
命元精兵ヲ遣ハレ夜行長ヲ襲フ行長撃テ之ヲ
却ケ走ルヲ追ヒ江ヲ濟リテ進ム命元等城ヲ棄
テ、走ル行長遂ニ平壤ヲ取ル秀家令シテ諸將

フシテ國都平壤間ノ諸城ヲ守ラシム大友義統
鳳山ヲ守リ黒田長政白川ヲ守リ小早川隆景閑
城ヲ守リ以テ德援ニ備フ我水軍諸將既ニ釜山
ヲ發シ進ンテ全羅ニ出ツ全羅水軍將李舜臣軍
艦數千艘ヲ以テ巨濟洋ニアリ水軍將加藤嘉明
等舜臣ト洋中ニ戰フテ敗ラル舜臣因テ閑山嶋
ニ屯シテ以テ我水軍ヲ拒ク是以テ水軍進ンテ
陸軍ニ令スル雖ハス七月明主其將祖承訓史儒
ヲ遣ハシテ精兵五千ヲ率ヒテ朝鮮ヲ援フ承訓
等進ンテ朝鮮ニ入り人ニ間フテ曰ク平壤ノ和

兵已ニ退クヤ否ヤ曰ク未シ承訓酒ヲ舉ク祝シ
テ曰ク天我ヲシテ大功ヲ成サシムルナリト進
ンテ平壤ニ逼ル行家之ヲ城外ニ拒キ撃テ大ニ
之ヲ破リ史儒ヲ斬ル承訓身ヲ挺ンテ走ル明國
敗報ヲ得テ舉朝震動ス清正既ニ咸鏡道ニ入り
朝鮮ニ王子咸鏡北道ニ遁ルヲ聞キ自カラ輕
兵ヲ率ヒテ日ニ行クコト數百里ニ王子會寧府
ニアルヲ聞キ驅テ之ニ赴ク行クニト五十日ニ
シテ始テ達ス府使鞠景仁ニ王子ヲ拘ヘ降ヲ乞
フ是ニ於テ清正ニ王子及ヒ大臣等ヲ拘ヘ之ヲ

鏡城ニ護送セシム景仁ニ問フテ曰ク此ヨリ北
方何ノ國ノ景仁曰ク元良哈ト云清正進ンテ其
境ニ入り一城ヲ攻テ之ヲ拔ク既ニシテ清正兵
ヲ鏡城ニ遷ス二十日ニシテ始テ達ス明既ニ敗
報ヲ得テ議シテ曰ク秀吉ノ兵勝ニ乘レテ遠ク
闕ノ未タ與ニ鋒ヲ爭フ可ヤラス且ツ和ヲ議シ
テ以テ禍ヲ紓スルニ如カスト越人沈惟敬ヲ用
ヒテ和議ヲ圖ラシム惟敬乃チ朝鮮ニ入り書ヲ
行長ニ送リテ和ヲ請フ行長惟敬ヲ城外ニ見ル
惟敬ニ謂テ曰ク明和ヲ欲ヒハ宜シク使ヲシテ

海ヲ濟ラシム可シ因テ數條ヲ約ス惟敬盡ク其
意ニ順ヒ歸リテ報ヲ取り五十日ニシテ後來ル
ヲ約シテ歸ル乃チ平壤西北十里ノ地ヲ取レテ
俱ニ相踰ユルヲ勿ラシム是ニ於テ我兵平壤ニ
アル者西ニ下ラス然レ朝鮮ノ兵竊カニ諸道ヲ
發ス九月清正鏡城ヲ發シ安邊ニ歸ル十月是ヨ
リ先キ大礮盡ス秀吉因テ京師ニ歸ル此ニ至リ
テ奏請フテ彼名古屋ニ赴ク清正既ニ盡ク威鏡
道ヲ定メ長驅遼東ニ入ラント欲ス行長惟敬ノ
期ヲ過シ至ラサルヲ以テ令ヲ軍中ニ下シ復攻

具ラ修メシム朝鮮王書ヲ飛ハシテ急ヲ明ニ告
ク明ノ群臣議レテ曰惟敬ノ説信ス可カラス今
天寒ク馬肥タリ互シク兵ヲ出シテ秀吉ヲ拒ク
可シト李如松ヲ以テ大將トシ大將軍ヲ率ヒテ
東キシム
二十二年五月十三年巳癸正月李如松大軍ヲ帥ヒニ
順安ニ至リ人ヲシテ行長ニ告テ曰沈惟敬至ル
和議既ニ成ルト行長喜ク一將ヲ遣ハシ二十人
ヲ以テ順安ニ至ラシム如松ノ偏將查大受誘テ
與ニ酒ヲ飲ム酒酣ニシテ伏起ル二十人搏戰走

リテ平壤ニ帰ル行長大ニ驚キ小西如安ヲシテ
往テ如松ヲ詰ラシム如松慰解シテ遣帰ス遂ニ
諸軍ヲ以テ平壤ニ逼ル行長急ニ守備ヲ修メ急
ヲ鳳山ニ告ク如松兵ヲ分テ四門ヲ攻メ我兵殊
死シ戦フ如松四面ヨリ大礮火箭ヲ用ヒ毒煙城
ヲ蔽フ我兵大ニ苦シム行長孤城ヲ以テ支フ可
カラス且ツ鳳山人兵未ル援ハサルヲ以テ夜潜
カニ攻メ師ヒテ城ヲ出テ鳳山ニ至ル大友義統
既ニ遁レテ國都ニ帰ル行長遂ニ退テ國都ニ至
ル立花宗茂平壤ノ急ヲ聞キ赴キ救フ路ニシテ

行長ニ遇フ行長曰ク大敵追至ル速カラスト宗
茂乃チ數伏ヲ設ケ之ヲ要撃ス敵狼狽シテ走ル
國都ノ諸將使ヲ遣ハシ大同江以東ノ諸城ヲシ
テ皆軍ヲ國都ニ帰サシム諸將皆之ニ從フ獨リ
小早川隆景毛利秀包立花宗茂肯セスレテ曰ク
吾輩カヲ竭シ國ニ報スル固ヨリ今日ニアリ且
ソ明軍勝テ驕ル何ソ懼ルニ足ント諸將之ヲ
促ス急ナリ乃チ帰ル李如松既ニ一戰平撃ヲ陷
イル遂ニ進シテ國都ニ逼ル諸將守城ノ事ヲ議
ス宗茂曰城ニ嬰リテ守ラハ大兵合圍援路四絶

馬シツ又キヲ支ヘン兵ヲ城外ニ出シ戰ヲ決セ
ンニ如カスト隆景亦之ニ從フ隆景乃今宗茂及
ヒ毛利秀包ト李如松ヲ碧蹄館ニ迎ヘ壞ツ大戦
良又呼声天ニ動カス遂ニ大ニ明軍ヲ破リ斬首
一万殆ントト如松ヲ獲ントス北ルヲ追フテ之ヲ
江ニ擠ス溺屍江ヲ蔽フテ流ル如松痛哭退テ坡
州ニ入り復進戰フコト能ハス時ニ清正咸鏡ニ
アリ秀家之ヲ召還ス清正國都ニ歸ル五月李如
松碧蹄館ノ敗ニ懲リ沈惟敬ヲレテ後和議ヲ圖
ラシム惟敬復國都ニ来リ厚ク行長ニ賂ナフテ

曰太閤朝鮮ノ俘ヲ帰サハ則チ朝鮮ノ二道ヲ割
キ封シテ王トセント行長寺素ヨリ不學封王ノ
故事ヲ知ス以為ラク明ニ王タルノ謂ナリト乃
チ秀吉ニ報シニ日明人殿下ヲ尊ニテ皇帝トセ
ント欲スト秀吉乃チ和ヲ許ス國都ノ諸將退テ
慶尚ニ至リ蔚山東萊等十八邑ヲ起シ以テ秀吉
ノ令ヲ俟ツ明主沈惟敬等ヲ遣ハシテ名古耶ニ
至ラシメ秀吉ニ謁ス惟敬還ルニ及ンテ小西如
安ヲ遣ハシ俱ニ往シム清正虜ニスル所ノ二王
子等ヲ放還ス遂ニ諸將ニ令シテ晋州城ヲ攻シ

本朝文獻備考卷之三十一 日本書紀 卷之三十一 本朝文獻備考卷之三十一 日本書紀

六月諸將兵ヲ合セテ晋州城ヲ圍ミ遂ニ之ヲ
拔キ城將徐元禮ヲ斬ル惟敬来リテ行長ヲ見テ
曰公等和ヲ許シ今晋州ノ事アルハ何ソヤ行長
怒テ曰汝和ヲ請フニ明兵益朝鮮ニ入ルハ何リ
ト惟敬答フル城ハ去テ北京ニ至リ李如松以
下ヲ召還ス小西如安既ニ遼東ニ至ル明主如安
ヲ疑ヒ敢テ納レズ秀吉如安ヲ久シク還ラサル
ヲ以テ以テ為ラス惟敬已レヲ欺クト既ニシテ大
ニ諸將ヲ召シ會議シテ曰朝鮮ノ事今日ノ狀ノ
如クニハ何時定マランヤ吾將ニ自カラ海ヲ航

セントス淺野長政之ヲ諫ム秀吉聽カス既ニレ
テ肥後賊徒蜂起スルニ會ス秀吉乃チ親征ヲ止
ム八月秀頼生ル秀吉大坂ニ歸ル
二千二百五十四年^{甲午}正月秀吉大ニ伏見ニ城ヲ
十二月小西如安燕京ニ至リ明王ヲ見ル明主李
宗誠揚方亨及ヒ沈惟敬ヲ以テ使トシ如安ト俱
ニ發セシム
二千二百五十五年^{乙未}三月伏見城成ル秀吉徙リ
居ル夫人淺井氏ヲ淀ニ置ク世呼テ淀君ト云セ
月関白秀次罪アリ秀吉之ニ死ヲ賜フ是時ニ當

リ明ノ三使既ニ朝鮮ノ地ニ入り疑懼敢テ進マ
ス
二千二百五十六年^丙慶長ト攻元ス正月小西行
長朝鮮ヨリ帰リ和成ルヲ告ク沈惟敬私カニ行
長ニ從ヒ来リ物ヲ秀吉ニ獻シテ去ル四月惟敬
李宗誠ヲ欺テ曰和敗レ日本ノ兵將ニ大ニ来ラ
ントスト宗誠大ニ懼レ遂ニ遁去ル明王遂ニ方
亨ヲ以テ正使トシ惟敬ヲ以テ副トス朝鮮ノ使
者亦從行ス六月明及ヒ朝鮮ノ使者海ヲ濟ル我
諸將兵ヲ釜山ニ留メテ凱旋ス八月使者伏見ニ

至ル秀吉朝鮮ノ使者微賤ナルヲ以テ責テ之ヲ
見ス九月秀吉明使楊方亨沈惟敬ヲ召シ見ル惟
敬封冊金卯冕服ヲ奉ツル翌日秀吉使者ヲ饗ス
猶兼兌ヲレテ冊文ヲ讀マシム文中汝ヲ封レテ
日本國王トスルノ語アリ秀吉大ニ怒リ冊書ヲ
裂テ曰吾日本ヲ掌握ス王タラント欲セハ則チ
王タラン何ソ彼ノ封ヲ待ンヤ且ツ吾ニレテ王
タラハ天朝ヲ如何ント行長ヲ召レテ之ヲ誚メ
即夜加藤清正等ヲシテ明韓ノ使者ヲ逐ハシム
遂ニ令ヲ西南四道ニ下シテ兵十四万人ヲ發レ

明年二月ヲ以テ悉ク名古耶ニ會セシム以テ再
夕七朝鮮ヲ伐ツ
二千二百五十七年酉正月小早川秀秋ヲ以テ元
師トシ毛利秀元浮田秀家之ヲ副タリ黒田孝高
ヲ以テ參謀トス兩先鋒及ヒ諸將皆前役ノ如シ
兩先鋒既ニ海ヲ濟リ行長ハ釜山ニ軍シ清正ハ
西生浦ニ軍ス朝鮮前役ニ懲リ所在奔竄ス二月
秀秋等釜山ニ至リ山海ノ形勢ニ因リ壘塔ヲ列
シ以テ根據ノ地トス明使既ニ明ニ歸ル明大ニ
驚キ復大ニ兵ヲ募リ邢政楊鎬麻貴等ヲ以テ將

トシ率ヒテ東下セシム七月水軍ノ將藤堂高虎
脇坂安治加藤嘉明等唐嶋及ヒ開山嶋ヲ攻テ大
ニ韓將元鈞ヲ破ル既ニシテ明將楊鎬等至ル元
鈞ヲシテ進ンテ釜山ヲ禱シム八月行長元鈞ヲ
絶影嶋ニ撃テ大ニ之ヲ破リ鈞ヲ斬ル進テ南海
順天ヲ陷イレ豆恥津ヨリ上陸シ清正ノ兵ト合
シ黄石城ヲ攻テ之ヲ取ル乃チ二道并ヒ進ンテ
南原ヲ攻ム守將楊元城ヲ棄テ走ル我軍進ンテ
全州ニ至リ遂ニ國都ニ入ンユトヲ議ス韓王水
陸軍皆敗ル、ヲ聞キ李舜臣ヲシテ三道ノ水軍

ヲ統ヘ錦嶋ニ至ラシム我將菅正陰ト碧波亭下
ニ戰フ正陰敗死ス舜臣因テ古今嶋ニ據リ我水
軍ヲ拒ク毛利秀元黒田長政等ノ一軍進ンテ國
都ニ迫ル九月明將解生揚登山等ト稷山ニ戰フ
テ大ニ之ヲ破ル此ニ於テ明軍國都ニアル者敢
テ出テス我軍亦持重シテ進マス天漸ク寒シ十
月清正退テ蔚山ヲ守ル行長退テ順天ヲ守ル諸
將管ヲ連子テ釜山ト声援ヲ為ス十一月明將邢
珣等既ニ韓ニ入り都城ニ會シ戰ヲ議ス乃チ楊
鏞麻貴ヲ以テ將トシ軍ヲ分テ三トシ諸道ノ接

路ヲ絶チ大兵蔚山ニ集マル清正淺野幸長ト堅
ク之ヲ守ル明將令ヲ下シ戰ヲ休ツ長圍ノ策ヲ
為シ我汲道ヲ絶ツ城兵飢渴皆紙ヲ食ヒ土ヲ煎
馬ヲ殺レテ其血ヲ飲ミ馬盡キテ乃チ溺ヲ飲ミ
僅カニ飢渴ヲ防ク天大ニ雪フリ寒殊ニ甚シ兵
卒或ハ指ヲ墮スニ至ル諸將蔚山ノ急ヲ聞キ秀
秋及ヒ毛利秀元黒田長政等道ヲ分テ赴キ救フ
行長亦海上ヨリ之ニ會ス
二十二年五月十八年 戊戌正月揚鏞我軍大ニ至ルヲ
聞キ身ヲ挺ンテ先遁ル麻貴解生等夜ニ衆シテ

圍ヲ解テ去ル長政馳テ明軍ヲ尾撃ス清正幸長
門ヲ闕テ突出撃テ大ニ明軍ヲ破ル諸將ノ蔚
山ヲ救フマ明我空虚ヲ覩ヒ一軍梁山ヲ襲フ黒
田孝高撃テ之ヲ破ル一軍釜山ヲ襲フ立花宗茂
般舟ニ撃テ之ヲ走ラス四月秀吉使ヲ遣ハシ諸
將ヲ諭シ秀秋清正行長島津義弘等十餘將ヲ留
メ其餘尽ク罷メ帰ラシム留ル者分テ諸城ヲ守
ル五月秀吉疾アリ七月秀吉疾篤シ徳川家康ヲ
召シ後事ヲ託シ且大老中老奉行ノ三職ヲ置キ
片桐且元ヲ以テ秀頼ノ傳トシ淺野長政石田三

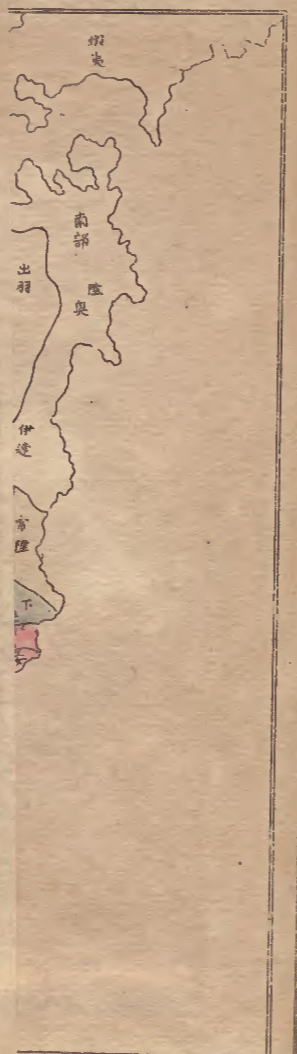
成ニ命シテ朝鮮ニ往キ兵ヲ救メシハ既ニシテ
疾大ニ篤シ將ニ瞑セントス再タヒ目ヲ張テ曰
我十萬ノ兵ヲシテ異域ノ鬼ト為ラシムル勿レ
ト言終テ薨ス是時ニ當リ行長順天ニアリ清正
蔚山ニアリ明將劉綎順天ヲ攻ム行長撃テ之ヲ
却ク九月明將麻貴再々ニ蔚山ニ逼ル時ニ立花
宗茂釜山ニアリ自カラ請ラテ五百人ヲ以テ往
テ清正ヲ援フ元濱ニ至リ明軍五十ニ遇フ曉霧
ニ衆シ撃テ之ヲ破ル遂ニ走ルヲ追フテ進ム或
ハ衆寡敵セサルヲ以テ止ム宗茂曰敵ノ馬足乱

ル追フ可シ追スハ我寡ヲ示スナリ追撃彼之
ヲ破ル既ニシテ明囚ヲ放チ還シ伏メ設ケテ以
テ俟ツ目ク吾寡ヲ示シテ之ヲ誘クナク夜半明
兵果シテ未リ襲フ伏起リ急ニ之ヲ撃ツ明軍狼
狽シテ走ル明宗茂蔚山外數十里ニ至リ清
正ト明軍ヲ夾ミ撃テ大ニ之ヲ破ル十月島津義
弘新寨ニアリ明將董一元ト晋江ヲ夾ンテ軍ス
既ニシテ明ノ捕虜我軍ニアル者火ヲ撃テ内應
スルニ會ス我兵顧ミテ驚ク明軍乃チ江ヲ渡リ
テ進ム連リニ數寨ヲ陷イル義弘故サラニ出テ

戦ハス明軍之ヲ侮リ直ニ進ンテ新寨ヲ攻ム義
弘兵殊死シ戦フ遂ニ大ニ明軍ヲ破ル存ルヲ追
フテ望津ニ至ル斬首三万級既ニシテ秀吉計至
ル諸將相告テ稍帰装ヲ治ム明謀秀吉ノ没スル
ヲ聞キ明主ニ報告ス明主大ニ喜ヒ奉朝相賀ス
因テ諸將ヲシテ我軍ヲ撃シム諸將新寨ノ敗ニ
懲リ敢テ進マズ釜山ノ軍已ニ秀秋ニ從テ對馬
ニ帰ル時ニ行長順天ニアリ劉綎復来リテ之ヲ
圍ム清正義弘及ヒ立花宗茂赴キ援ヒ劉綎ヲ撃
ツテ之ヲ走ラセ行長ヲ救キ還ル明將陳璘及李

舜臣等兵艦數十艘ヲ以テ我歸路ヲ扼ス義弘行
長止リ戰フテ之ヲ破リ舜臣等ヲ殺ス明軍敢テ
復追ハス我軍尽ク對馬ニ達ス十一月軍ヲ整ヘ
テ名古屋耶ニ至ル長政三成秀吉ノ遺命ヲ宐フ諸
將皆在夕諸將相率ヒテ伏見ニ詣リ秀頼ニ謁ス

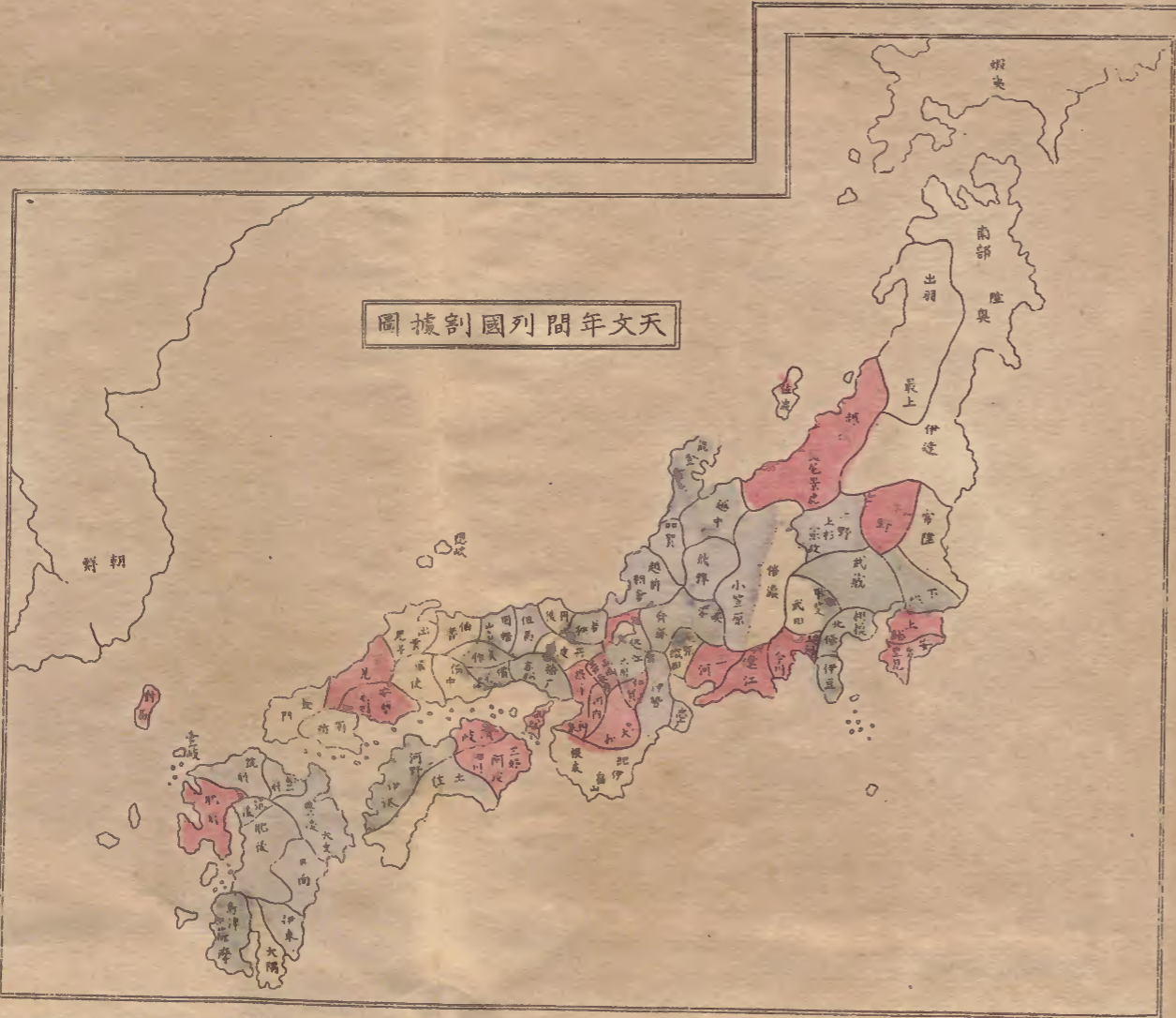
日本畧史卷之三終



舜臣等兵艦數十艘ヲ以テ我歸路ヲ扼ス義弘行
長止リ戦フテ之ヲ破リ舜臣等ヲ殺ス明軍敢テ
復追ハス我軍尽ク對馬ニ達ス十一月軍ヲ整ヘ
テ名古屋耶ニ至ル長政三成秀吉ノ遺命ヲ宜フ諸
將皆在夕諸將相率ヒテ伏見ニ詣リ秀頼ニ謁ス

日本畧史卷之三終

圖據割國列間年文天



天正年間群雄爭衛圖

